

擦文土器の編年と地域差について

塚本浩司

I 最初に

1980年代から擦文時代の長期間継続した大集落の発掘調査が増加し、土器の変化をよりはっきりと捉えることができるようになった。これに加え、千歳市末広遺跡（千歳市教育委員会1981；1982；1985）での白頭山一苦小牧火山灰（以下、B-Tm）の確認（新井1982）、釧路市材木町5遺跡での湖州鏡の出土（釧路市埋蔵文化財調査センター1989）、東北地方の土師器編年の進展（宇部1989など）により年代的な定点が得られた。また、小平町高砂遺跡（小平町教育委員会ほか1983a；1983b）・松前町札前遺跡（松前町教育委員会1985）などで底面に刻印を持つ坏が多く出土し、貼付囲繞帯文様（豊田1987）とともに地域差を示す可能性が指摘されている（宮塚1983；宇田川1986；1994；松下1986；瀬川1989；1996など）。これまで資料不足から意見の相違があったさまざまな問題を再び考え直す機会がきている。

北海道と東北地方の活発な交流・交易を具体的に示す北海道出土の五所川原窯産須恵器、東北北部出土の擦文土器、古代防御性集落にも注目が集まった。こういったことを踏まえて、東北の土師器文化との比較、さらに広い視野で擦文文化を位置付ける研究も行われている（三浦1994；1998；越田1997など）。文献史学からも考古学の成果を積極的に用いて、史料の少ない北方古代に新しい解釈を加えている（鈴木編1996；鈴木1999；斉藤1999；小口1999など）。このように、擦文文化研究は新たな局面に入っているといえる。

小論では増大した資料を踏まえ、新たに土器の編年を行う。ただし、すでに土器の流れそのものはほぼ明らかにされているとあってよい。しかし、今日広く用いられている佐藤達夫氏（佐藤1972）、宇田川洋氏（宇田川1980）、石附喜三男氏（石附1984）の擦文土器編年は発表されてから長い年月が経過している。その後行われた研究の多くは地域的なものであった。地域差がはっきりと捉えられておらず、地域間の相互の対応関係・系譜も不明であり、成立期・終末期も整理されていないという問題がある。

地域差を抽出し、時期的な対応関係、地域相互の系譜関係を考察するために、編年の細分を行い、青森県における研究、火山灰を用いて年代を決める。地域間の比較を行う際に、特色のまとまりの範囲についても触れる必要がある。最後にまとめとして擦文土器の画期を指摘し、土器の定義を行う。

Ⅱ 用語の問題

研究者によって擦文時代の土器は年代観だけでなく、用語も異なっている¹⁾。そのため、これから用いる用語をまず決めなくてはならない。しかし、すべての文化要素を考慮し、画期を捉え、周辺との比較を行わない限り、用語を決定することはできないであろう。このため、ここでは暫定的に定め、最後に再考することにした。

用語は次のように考えている。土師器文化が北海道に入ってきてから土器が使用されなくなるまでを擦文時代とする。年代は7世紀から13世紀である。7・8世紀には口縁に円形刺突文を持つものを中心とする土器群、すなわち北大Ⅲ式土器²⁾と、無文ないし横走沈線文を持つ土師器とが距離をおきながら共存している。擦文時代の土器が擦文土器なのであるが、同時期に用いられていたこの二つの土器を区別するために別の用語を用いる。9世紀にはいると東北地方とは違う変化を遂げ、文様が発達する。これからは擦文土器と呼ぶ。ただし、擦文時代の土器の総称としての擦文土器の用語を用いることもある。

Ⅲ 土器編年

1 方針

地域編年を行うに際しての問題は、地域的なまとまりが明らかにされていないことと、場所により資料の量の差が非常に大きいことである。このため、とりあえず調査例の多い場所での土器の流れを押さえ、各地域の対応関係、年代を考える。その後で周辺の地域と比較しながら特徴を明らかにし、時期ごとのまとまりの範囲を考察するという手順を取る。

大井晴男氏の遺跡分布図（大井1984）を参考に遺跡の集中が見られ、かつ調査例の多い近接した場所を選ぶ。札幌市・千歳市・恵庭市、小平町・苫前町、常呂町、松前町・奥尻町を取り上げる。札幌市・恵庭市・千歳市は石狩低地帯の、小平町・苫前町は日本海沿岸北部の、常呂町は道東部の、松前町・奥尻町は道南日本海側の代表とし、編年を行っていく（図1）。

これまでの擦文土器編年の問題の一つは、長胴甕を中心に行われ、他の器種に注意を向けることがほとんどなかったことである。長胴甕の分析の視点となった文様・口辺部形態は個体差が大きく、古いとされる要素も後に存続することが多い。

段階を設定するためには、器種構成の変化によって把握することが最もよいが、擦文土器は器種の種類が少なく、変化も非常に漸移的である。このため、最も形態の変化の激しい器種である坏・高坏の型式を分類し、セット関係をもとに、長胴甕の形態・文様を組み合わせるとまとまりを捉える。扱う資料は住居の床面出土を中心とした、一括性の高いものを用いる。擦文時代では層位的に出土する遺跡や堅穴の掘上土の重複関係が捉えられた遺跡は少数であり、基本的に堅穴住居には切り合い関係がない（藤本1976ほか）。このため、最初に型式学的検討を行い、次に層位学的検討を行って流れに矛盾がないかを確認する。

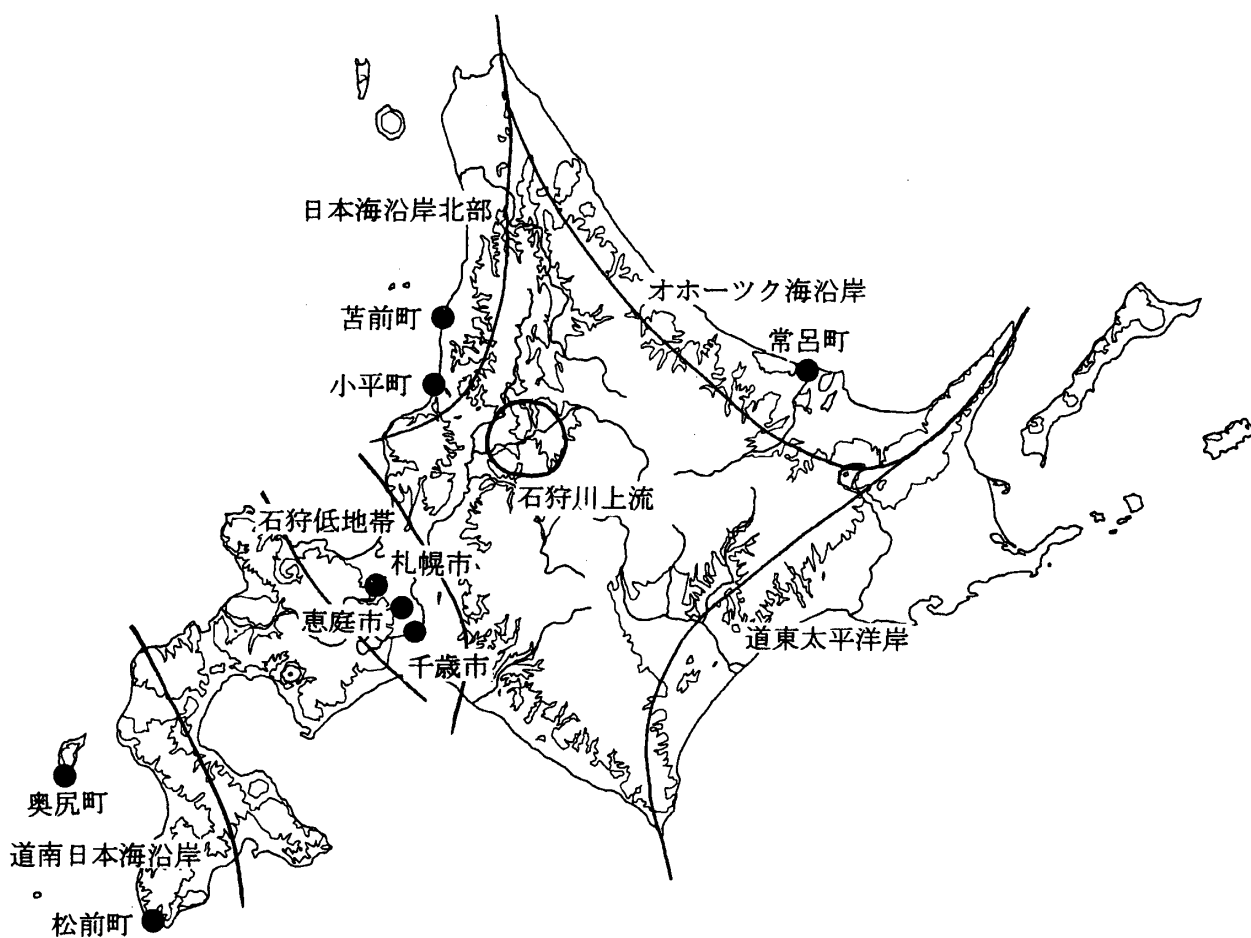


図1 都市・地域

器種は大きく長胴甕・球胴甕・坏・高坏に分ける。他に甑・注口土器・片口土器・鉢・土製支脚などがあるが、出土量は少ない。長胴甕は口径が胴部最大径よりも大きいものを指し、高さにより大型（20cm以上）・中型（20～10cm）・小型（10cm以下）に分ける（藤本1972b）。大型のものは赤変し、ススが付着したものが多く見られ、主に煮炊きに使用されたと考えられる³⁾。文様がないものが各時期、一定量含まれている。無文土器は文様を持つものとは形態が若干異なっているが⁴⁾、今回は特に取り上げない。球胴甕は胴部に丸みを持ち、最大径が口径よりも大きなものである。赤変・ススの付着はほとんど見られず、貯蔵に使われたと考えられる。高坏は坏に明瞭な脚部がついたものをさす。土器の部位の名称は基本的に『土師器・須恵器の知識』p29 図6（玉口・小金井1984）に従う⁵⁾。

他に東北からの搬入品であるロクロ土師器や赤焼き土器・須恵器が含まれる。ロクロ土師器は内面黒色処理されたものを指し、赤焼き土器は須恵器系土器とも呼ばれるものである（桑原1976）。器種は坏・大甕・小甕・長頸壺・短頸壺などが存在する。

坏・高坏は以下のように分類する（図2）。ただし、編年を始める段階であまり細かく分けることは混乱を招くだけなので、形態のみに注目し、調整・文様は分類の基準とはしない。

坏A 丸底で、底部と体部との境に段があり、そこから大きく広がるもの。内面にも対応する段がある。

坏B 平底に近いが、平らな面に置いても一部しか接地しない（平底風丸底と呼ぶ）。段が低い位置にある。口径に比して器高が低いもの。

坏C 体部に丸みを持ち、立ち上がる。口径と底径はほぼ同じで、器高が高いもの。

坏D 平底となる。D 1は口径が大きく、それに比べ器高が低いもの。D 2は口径が小さく、これに比して器高が高いもの。

坏E 平底で、底部が台状に張り出すもの。E 1に比べE 2ははっきりと底部が横方向に張り出している。

坏F 上げ底となるもの。F 1は軽い上げ底で、F 2は底部が分厚くなる。F 3は高い上げ底となり、外見は高坏のようであるが、底部は厚みが薄いために坏と見なす。

高坏A 形態のまともではないが、初期の段階にみられるものをまとめて指す。このため図はない。

高坏B 比較的脚部は短く、幅が広いもの。裾部も上げ底の程度が弱い。

高坏C まっすぐに伸びる柱状の脚部を持ち、高い上げ底のもの。坏部底は平らに広がる。立ち上がりは弱く、浅い。

高坏D まっすぐに伸びる柱状の脚部を持ち、高い上げ底のもの。坏部底は尖り気味である。体部半ばで立ち上がり、深い。

長胴甕は最も変化が規則的な大型の甕を基準とする。注目する属性としては全体的なプロポーション・口辺部の形態・文様・外面の調整である。これらは模式化して記述をある程度簡略化する⁶⁾。

長胴甕形態は以下のように分類する（図3）。

形態Ⅰ くびれを持ち、頸部に段をもつもの。

形態Ⅱ くびれを持つが、頸部に段はないもの。

形態Ⅲ くびれはなく、胴部上半が立ち上がるもの。

形態Ⅳ くびれはなく、胴部上半が緩やかに広がるもの。

口辺部形態は隆起帯による段やキザミと組み合わせて記述する⁷⁾（図4）。

口辺部形態a 外傾して端部が丸く収まるもの。

口辺部形態b 外傾して端部が角張るもの。

口辺部形態c 外傾して端部が角張り、中央がくぼむもの。

口辺部形態d 口縁部が若干立ち上がるもの。口縁直下がやや段状に膨らむ。

口辺部形態e 屈曲して立ち上がるが、程度が弱いもの。端部は丸く収まる。

口辺部形態f 横方向に広がった後、はっきりと直角に立ち上がるもの。

口辺部形態g fと形態は同じであるが、小さいもの。

口辺部形態h 短く外傾するもの。

口縁部文様は次のように分類する（図5）。

捺文土器の編年と地域差について

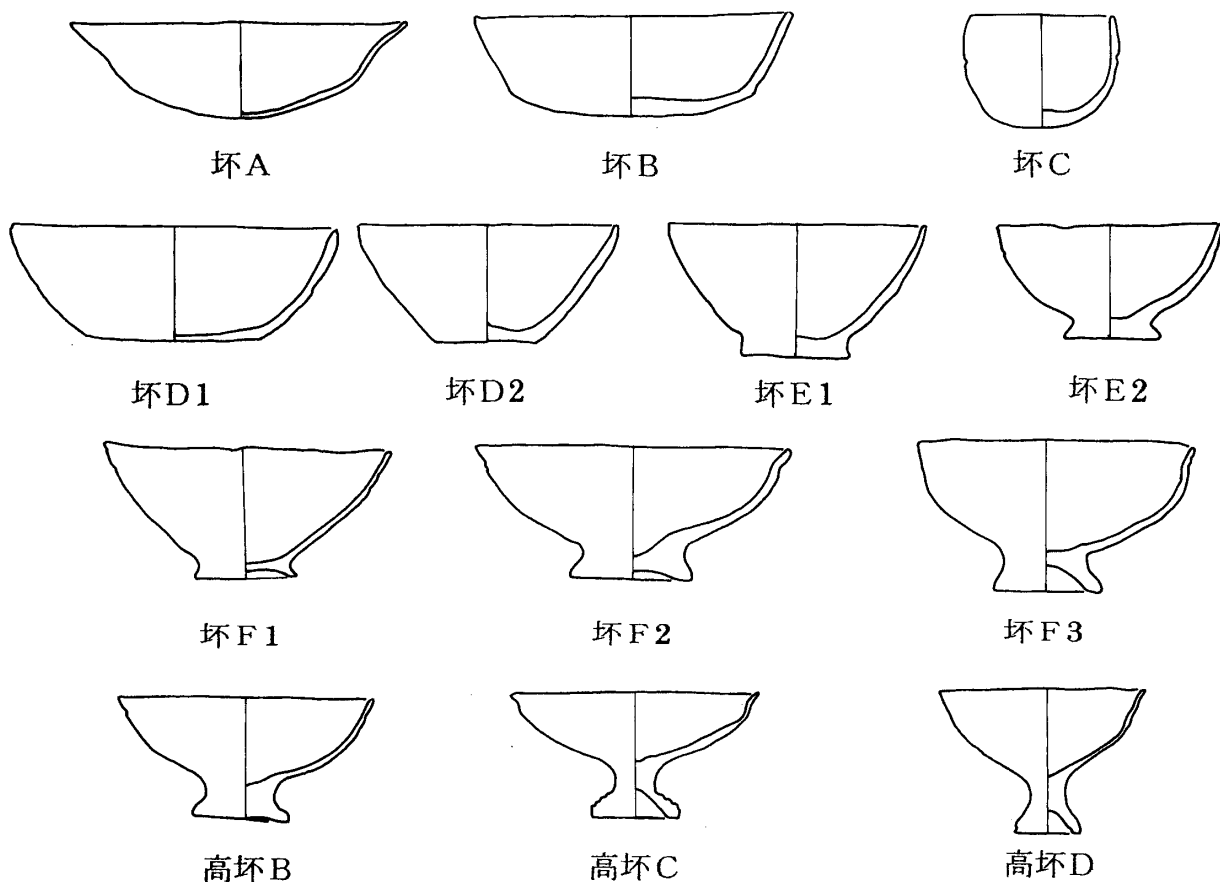


図2 坏・高坏形態模式図

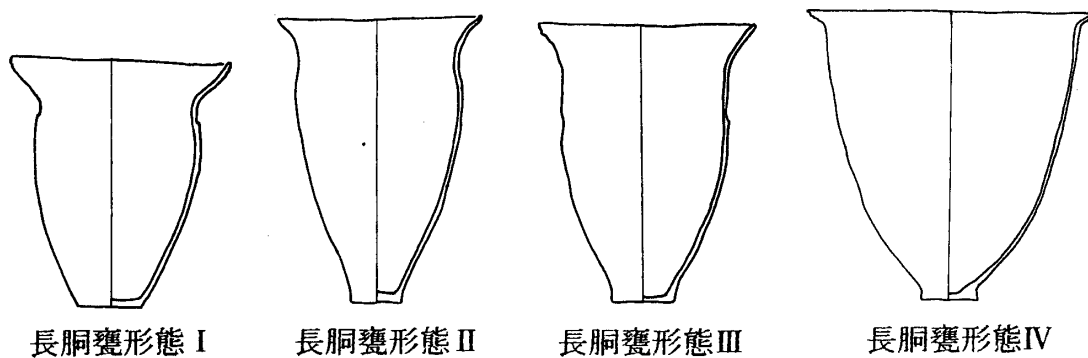


図3 長胴甕形態模式図

口縁部文様 i 口縁端部にキザミを持つ。

口縁部文様 ii 口縁直下の段にキザミが施される。

口縁部文様 iii 隆起帯による段が複数あり、その上にキザミが施される。矢羽根状となることが多い。

口縁部文様 iv 隆起帯による段はなく、キザミを持つ。

文様は数本で1単位となることが多い(図6)。

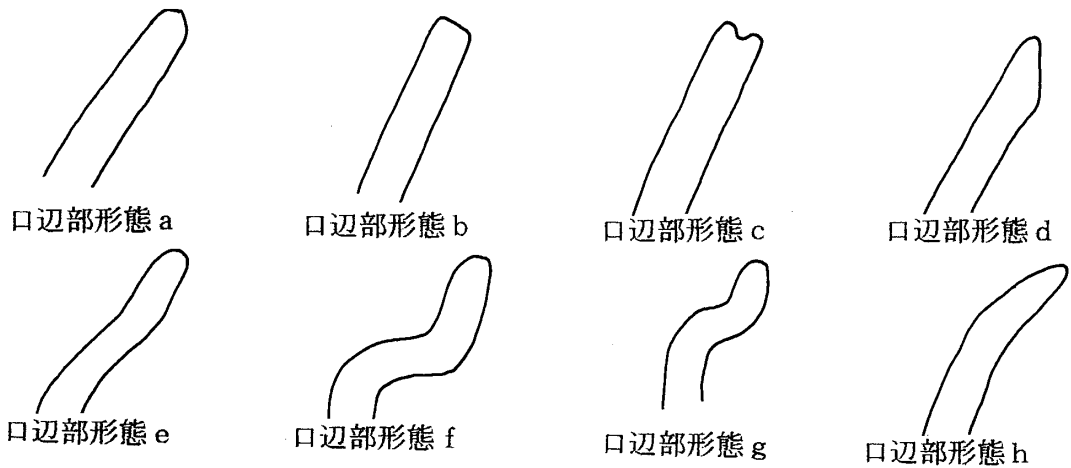


図4 口辺部形態模式図



図5 口縁部文様模式図

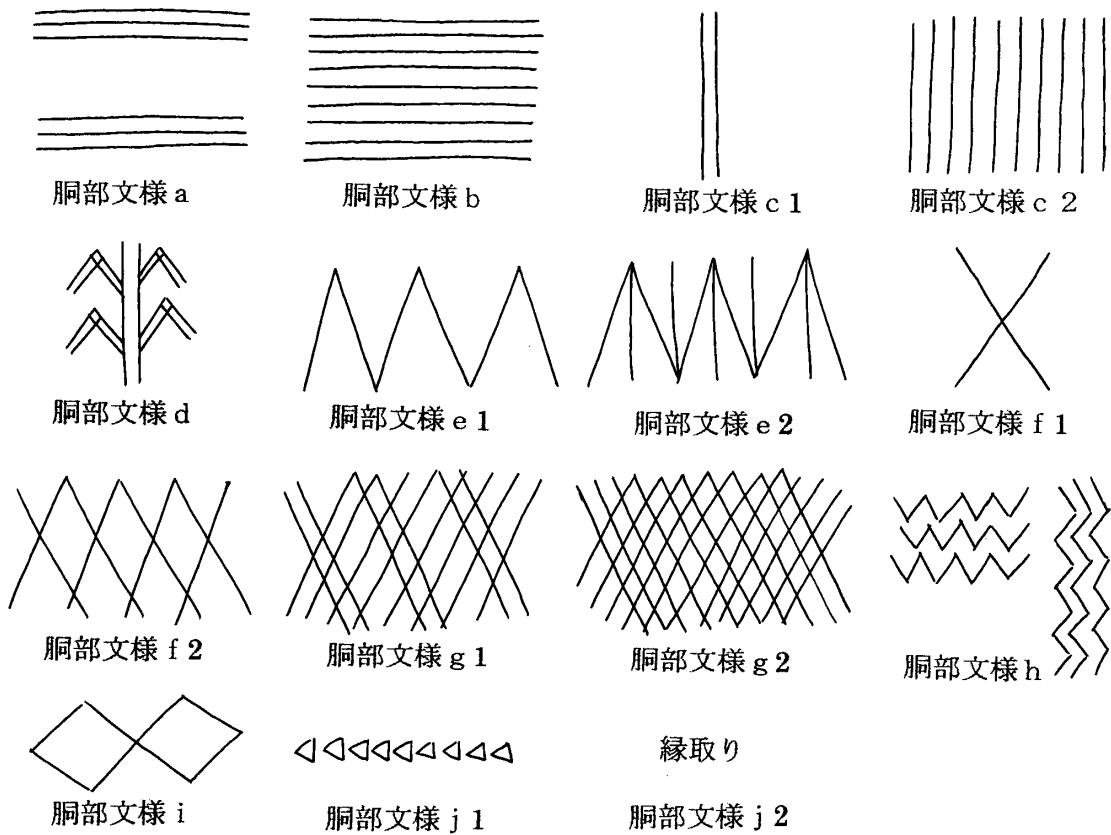


図6 文様模式図

擦文土器の編年と地域差について

- 文様 a 数本単位の横走沈線が口辺部と頸部に引かれ、間が無文となるもの。
- 文様 b 横走沈線が口頸部にびっしりと引かれるもの。
- 文様 c 縦に垂下する沈線。c 1 は間隔をあけるもので、c 2 はびっしりと引かれるもの。
- 文様 d 縦に垂下する沈線の両脇に「ハ」字文などが付け加えられたもの。単純なものから複雑なものまでバリエーションがある。
- 文様 e e 1 は鋸歯文。e 2 は鋸歯文の頂点から、縦に沈線が引かれるもの。
- 文様 f f 1 は間隔のあく「X」字文。f 2 は「X」字文が連続し、つながったもの。
- 文様 g g 1 は重ね書きされる斜位の沈線に間隔があくもの。g 2 は斜格子文。
- 文様 h いわゆる綾杉文。e 1 よりは単位が小さく、細かく描かれる。
- 文様 i 菱形文。
- 文様 j j 1 は三角形の刺突による直線で、文様帯の一番下に施されることが多い。j 2 は三角形の刺突で他の文様を縁取るもの。

これから大型の長胴甕・球胴甕・坏・高坏の変化の流れを見ていく。煩雑さを避けるために、前のグループと同じ特徴についてはあらためて触れない。

2 札幌市・恵庭市・千歳市

石狩川水系の河川沿いに小・中規模の集落が立地している。道内でも最も調査の進んだ地域である。

S 1 千歳市祝梅三角山 D 遺跡 2 号住居（千歳市教育委員会1978）出土土器を基準とする（図 7-1~9）。1・2号住居間の遺物も含める。

組成 長胴甕・球胴甕・坏 A・坏 C。

坏 底部はヘラケズリ、もしくはヘラケズリのちハケ。内面黒色処理される。

長胴甕 形態 I 口辺部 b。軽くつまみ上げられるものもある。口辺部にヨコナデによる段がつけられているほかは無文。調整はミガキ。

球胴甕 胴部が丸く膨らみ、口頸部は短く、広がり弱い。頸部に段もしくは沈線をもつ。調整は斜め方向のハケもしくはミガキ。

S 2 札幌市 K435 遺跡 C 地点（札幌市教育委員会1993）出土土器を基準とする（図 7-10~24）。破片の接合関係が検討され、竪穴外の遺物も一括性が高いことが分かっている（仙庭1993）。

組成 長胴甕・球胴甕・坏 B・坏 C・坏 D 1。須恵器。千歳市丸子山遺跡（千歳市教育委員会1994）・末広遺跡（千歳市教育委員会1981；1982）では高坏 A・甌が出土している。

坏 ほとんどが坏 B である。坏 D 1 では段が沈線に置き換わっている（21）。調整は丁寧なヘラミガキである。

長胴甕 形態 I 口辺部 c・c i。口縁部のキザミは数個一単位で、間隔があく。文様は a で、沈線は先の四角い工具で、段状になるように施される。調整はほとんどハケ。

球胴甕 胴部が大きく張り出し、最大径で尖り気味となる。底部は小さく、安定が悪い。頸部・口辺部に沈線を持つ。口縁端部にキザミが施されるものもある。胴部最大径より上では横方向、下では縦方向のミガキ。

S 3 K435遺跡 D 1 地点出土土器を基準とする (図 7-25~38)。破片の接合関係が分析され、竪穴外の遺物も一括性の高いことが分かっている (仙庭1993)。

組成 長胴甕・坏 D 1・坏 D 2・注口土器。須恵器。

坏 段はなく、沈線が体部中央に引かれる。

長胴甕 形態Ⅲ 口辺部 a。口頸部はあまり広がらず、全体にスマートな器形。口辺部はヨコナデされ、頸部にヨコナデによるくぼみ、もしくは1本の沈線が引かれる。キザミや文様はない。

S 4 札幌市サークル会館遺跡 (北海道大学1981) 出土土器を基準とする (図 8-1~17)。住居 3 軒はほぼ同時期のものと考えられている (横山1981)。

組成 長胴甕・球胴甕・坏 D 1・坏 D 2。須恵器。

坏 体部中央に沈線、もしくは段をもつ。

長胴甕 形態Ⅰ 口辺部 a・c・d・d i。文様 a。

球胴甕 胴部の張りは弱い。口縁部はつまみ上げられる。

S 5 K435遺跡 D 2 地点18号住居・D 3 地点22号住居、札幌市 K39遺跡長谷工地点第 6 号竪穴住居 (札幌市教育委員会1997a) 出土土器を基準とする (図 8-18~29)。

組成 長胴甕・球胴甕・坏 D 2。ロクロ土師器・須恵器。

坏 形態は共伴するロクロ土師器と類似する。

長胴甕 形態Ⅱ 口辺部 a・b・c i。文様は b が主体を占めるが、b + f 2, b + j 1 が少数混じる。沈線は先の丸い工具により引かれる。ミガキ調整のものが増加する。

球胴甕 胴部の張りが弱くなる。調整はミガキで胴部全面斜めの方向である。

S 6 札幌市サクシュコトニ川遺跡第 2 文化層 (北海道大学1986) 出土土器を基準とする (図 8-30~41)。

組成 長胴甕・球胴甕・坏 D 2・坏 E 1・土製支脚。ロクロ土師器・赤焼き土器・須恵器。札幌市 K446遺跡 (札幌市教育委員会1979) では球胴甕の破片が出土している。

坏 坏 E 1 が主体となる。沈線が口縁部に引かれる。

長胴甕 形態Ⅱ 口辺部 b・c i。文様は b ないし、b + e 1, b + f 2 など。サクシュコトニ川遺跡では短い口頸部が軽く外傾する大小の甕が見られる (33・34)。このタイプには文様はまったくない。

S 7 札幌市 K460遺跡第 4 号竪穴住居址・SP 地区 (札幌市教育委員会1980), K39遺跡第 6 次調査第 50号竪穴跡 (札幌市教育委員会2001), 千歳市末広遺跡 I H - 44住居址 (千歳市教育委員会1981) 出土土器を基準とする (図 9-1~13)。

捺文土器の編年と地域差について

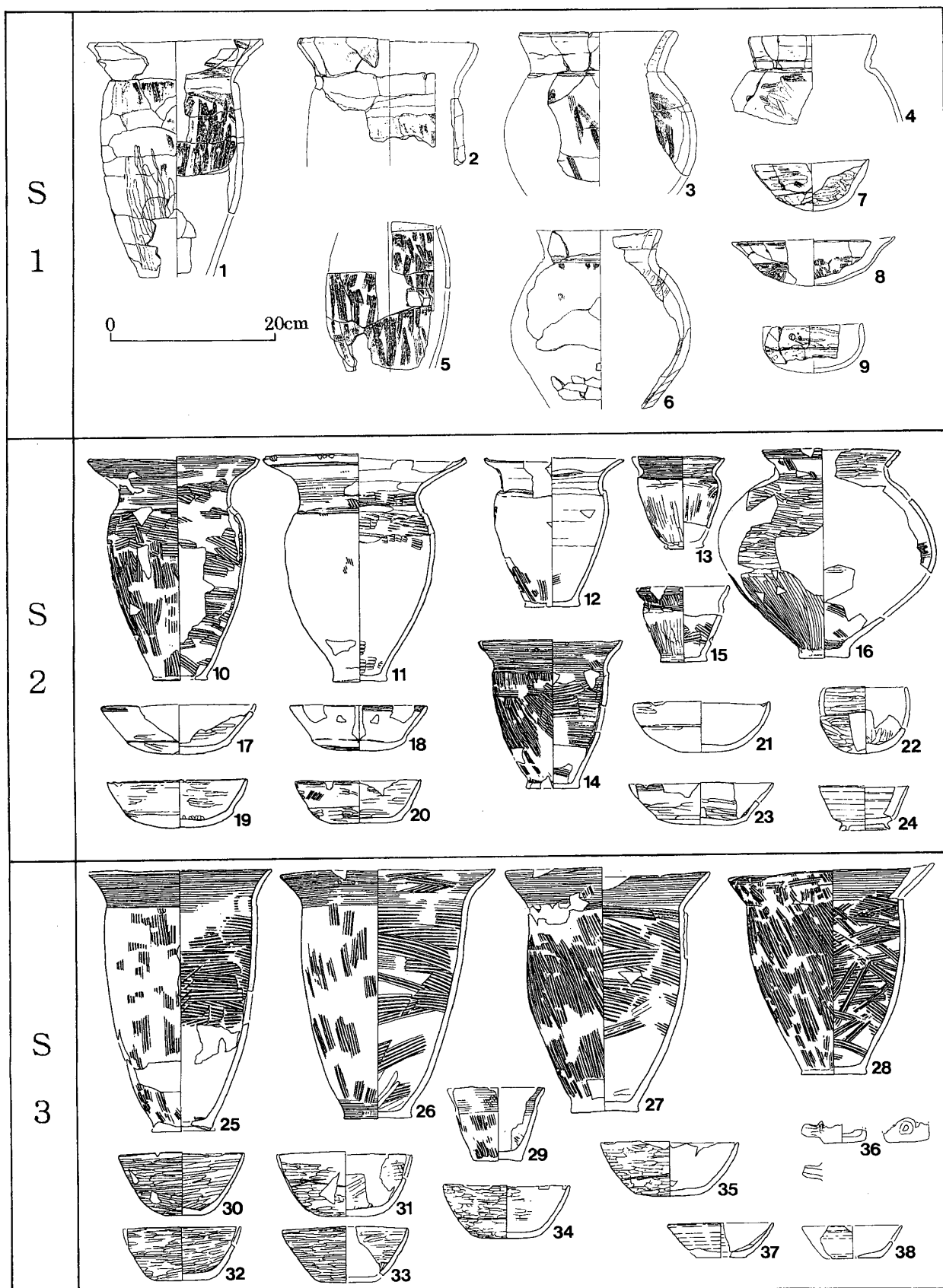


図7 札幌市・恵庭市・千歳市の土器 (1)

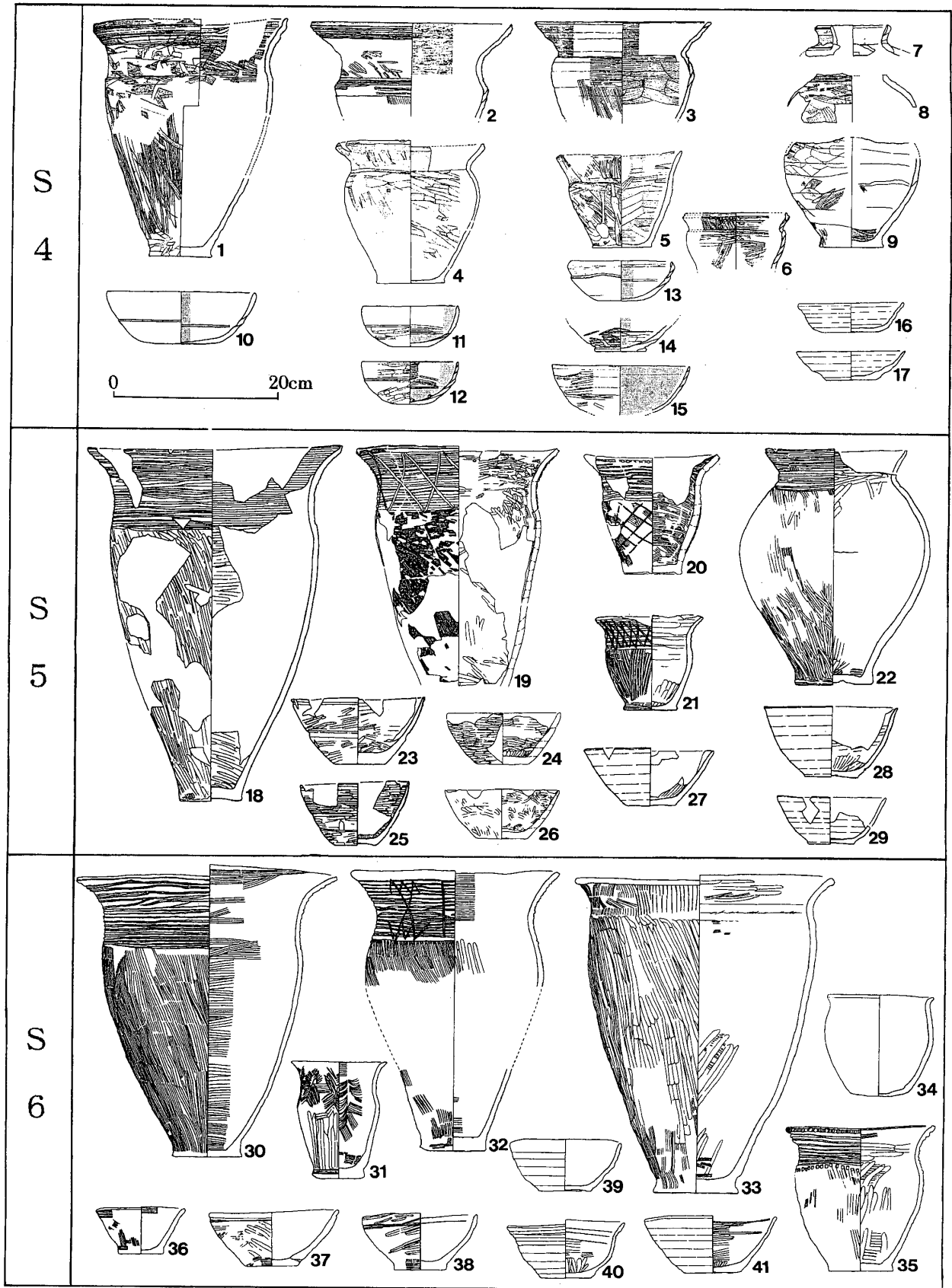


図8 札幌市・恵庭市・千歳市の土器 (2)

擦文土器の編年と地域差について

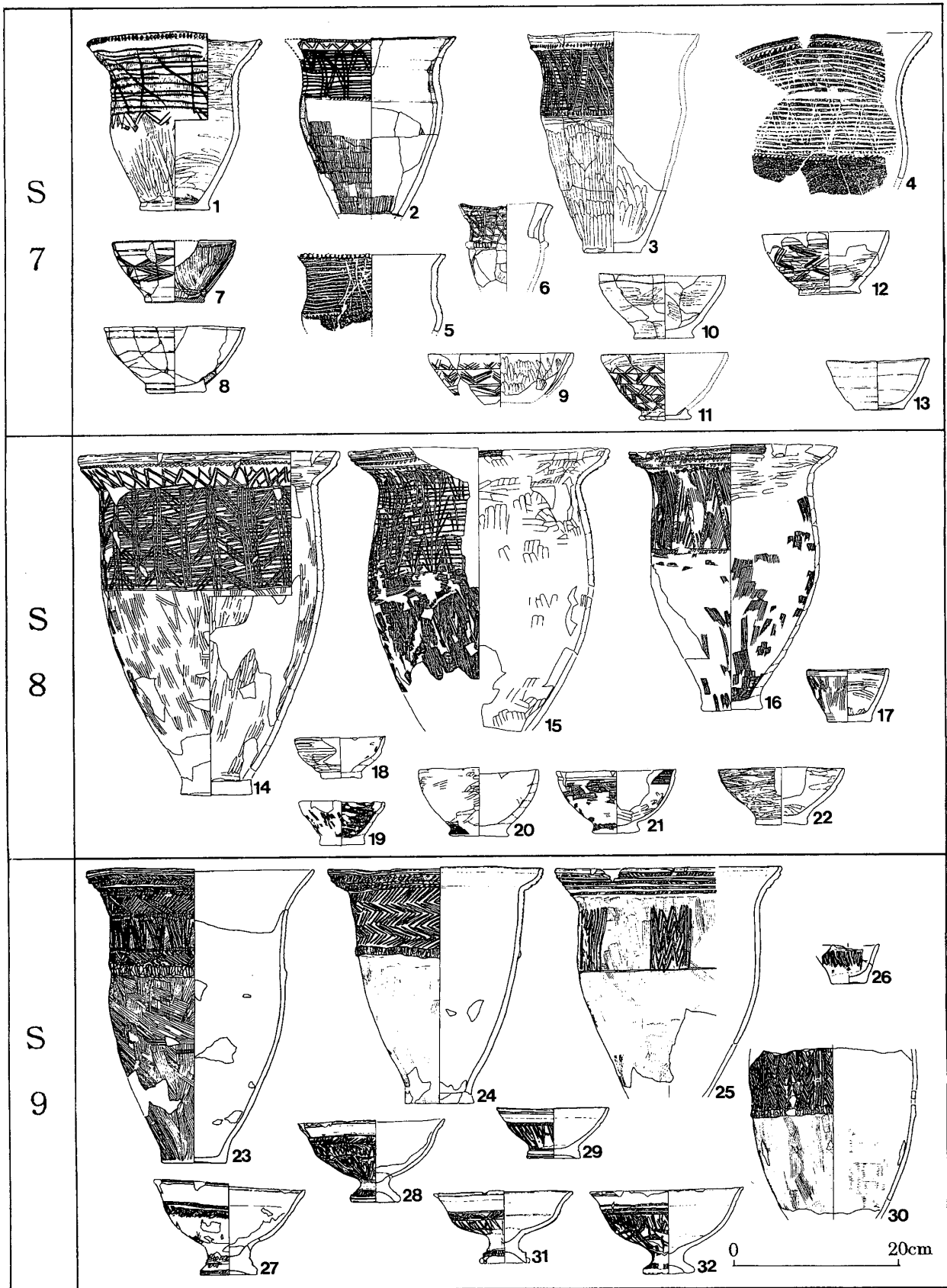


図9 札幌市・恵庭市・千歳市の土器 (3)

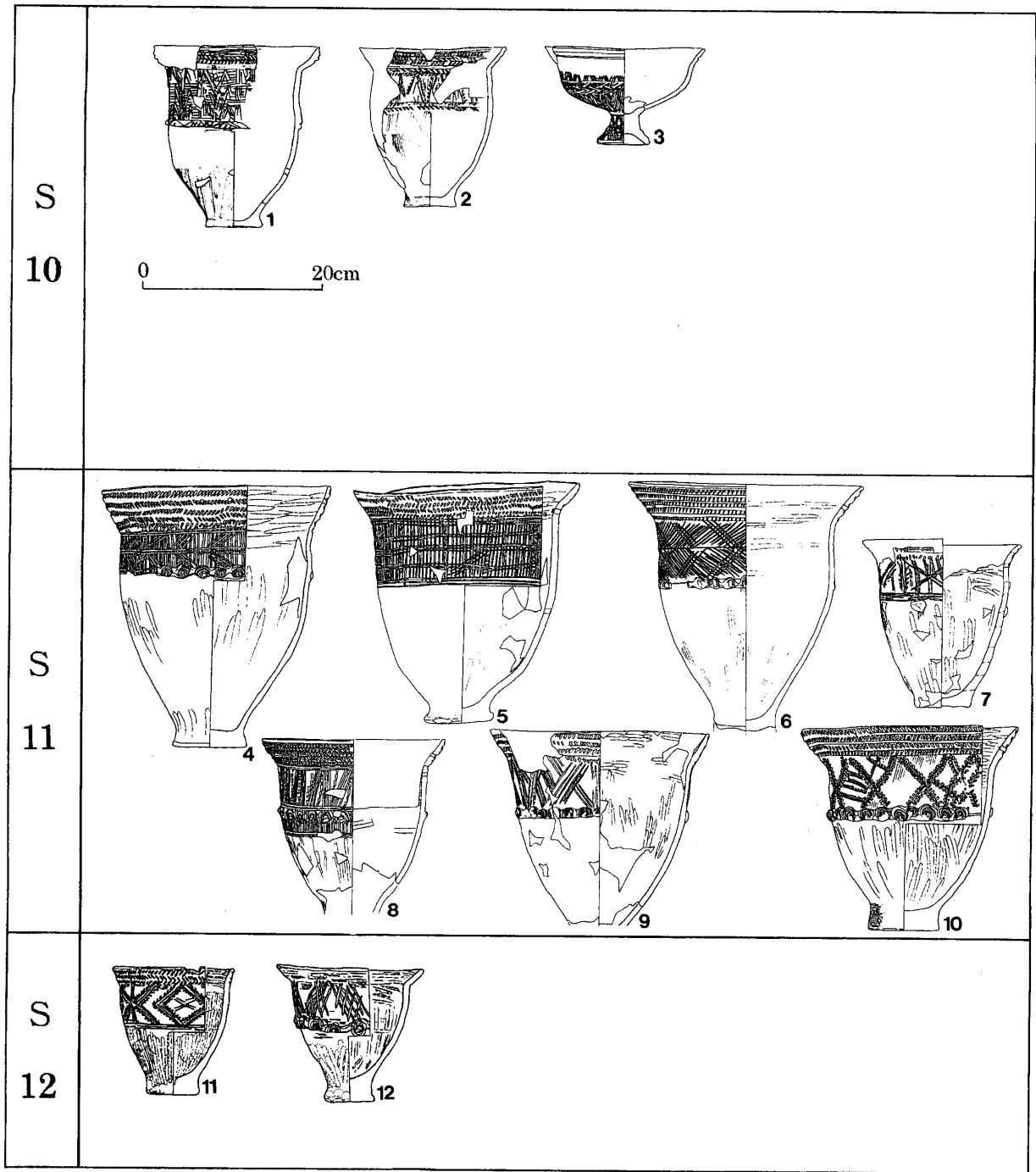


図10 札幌市・恵庭市・千歳市の土器 (4)

組成 長胴甕・坏 E 2・坏 F 1。ロクロ土師器・須恵器。

坏 坏 F 1 が出現する。文様を持つものも多く、横走沈線で区切られ、間に鋸歯文が描かれる。

長胴甕 形態 II 口辺部 c i・d ii・e ii。口縁直下にキザミが施されるものが現れる。文様は b + e 1。b + g など、横走沈線のみの文様はほとんどなくなる。

S 8 K39遺跡長谷工地点第 1・2号 竪穴住居，K39遺跡第 6次調査第 31号 竪穴跡出土土器を基準とする (図 9-14~22)。

組成 長胴甕・坏 E 2・坏 F 1。須恵器。

坏 口縁部に沈線を持つ以外は無文のものが多い。

長胴甕 形態Ⅱ・Ⅲ 口辺部 f iii。くびれを持たないものが少数現れる。文様は b + d といった複雑な文様が重ね描きされるものと、地文を持たず e 1 + j 2・f といったものがある。施文具の先が鋭く、沈線が細くなる。

S 9 札幌市 K441遺跡北34条地点（札幌市教育委員会1989）出土土器を基準とする（図9-23～32）。焼土周辺からまとまって出土している。

組成 長胴甕・坏 F 2・高坏 B・鉢。搬入土器は見られない。

坏・高坏 高坏が現れる。口縁部に沈線が引かれ、体部に鋸歯文やキザミを持つ。脚部は短く、裾部に段があり、坏部内面底は押し窪められている。

長胴甕 形態Ⅲ 口辺部 a iii・f iii。横走沈線により文様が区切られ（以下、複段文様）、e 1・g 1 が描かれるものと、文様 h のだけのものがある。前者は沈線が先に描かれる。文様帯の下に馬蹄形押捺文貼付圍繞帯文様を持つものの割合が急増する。

S10 札幌市 K36遺跡 2号 堅穴（札幌市教育委員会1987b）出土土器を基準とする（図10-1～3）。

組成 長胴甕・高坏 D。

高坏 口縁部に沈線をもち、口縁下の無文となる部分の幅が広い。坏部・脚部には綾杉文・鋸歯文を持つ。

長胴甕 形態Ⅲ 口辺部 h iii。文様は b + d・e 2 + j 2。貼付圍繞帯文様を持つ。

S11 K39遺跡第6次調査第38・41号 堅穴住居跡，札幌市 K499遺跡・K501遺跡（札幌市教育委員会1999）出土土器を基準とする（図10-4～10）。

組成 長胴甕のみ。

長胴甕 形態Ⅲ・Ⅳ 口辺部 h iii・h iv。底部が分厚く、内面が丸いものがある（5・6）。文様は c 2 + b・g 1・e 1 + j 2・f 2 + j 2 など。沈線は浅く鋭い。馬蹄形押捺文貼付圍繞帯が付けられるものがほとんどである。調整はミガキ。

S12 恵庭市ユカンボシ E10遺跡 H-6 出土土器（北海道埋蔵文化財センター1998）を基準とする（図10-11・12）。

組成 小型の長胴甕のみ。

長甕 形態Ⅳ 口辺部 h iv・h。文様は d + j 2，粗雑な格子文。

坏の形態の変化を見ると、丸底で体部中央に段を持ち大きく広がる坏 A の S 1 から、平底風丸底となり、段の位置が下がった体部の広がり弱い坏 B の S 2 へ、さらに平底で器高が高い坏 D 1・坏 D 2 の S 3・S 4 へと変わる。段が沈線に置き換わっている。S 5 になるとさらに器高が高くなる傾向が強まり、ロクロ製の坏が伴うようになる。S 6 からは底部が台状に張り出す坏 E 1 が

中心となり、沈線が口縁部に上がってくる。S7では底部の張り出しが強まる坏E2、上げ底になる坏F1が現れ、文様を持つものが増える。S8は文様を持つ坏が減るほかは大きな変化はないが、S9になると高坏Bが出現し、S10では脚部が長くなり、坏部が深い高坏Dとなる。また、口辺部の無文部分の幅が広がる。S11・S12では坏・高坏は見られない。このようにS1、S2、S3・S4、S5へと漸移的に坏が変化していくことが分かる。ただし、S8の軽い上げ底で体部の開きが弱い坏F1とS9の高坏Bとの間に形態的な飛躍がある。これは他地域からの影響があったためであると考えられる。

長胴甕は頸部にはっきりした段とくびれを持ち無文のS1から、横走沈線という文様、口縁部のキザミが現れるS2となる。S4は大きな変化はないが、S5では頸部の段がなくなり、これまで上下に分かれていた横走沈線が口頸部にびっしりと描かれ、鋸歯文が重ね描きされるものが若干混じるようになる。S6、S7と重ね描きされる文様が複雑化し、種類も増加する。またS7では角張っていた口縁部に丸く収まるものが現れ、口辺部が徐々に立ち上がり、キザミの施される場所が口縁端部から下がってくる。S8では重ね描きされる文様が最も複雑で、口辺部がはっきりと立ち上がり、隆起帯による段と矢羽根状のキザミが施される。S9ではくびれと地文であった横走沈線がなくなり複段の文様が現れ、貼付圍繞帯文様を持つ割合が高まる。S10、S11と体部が単純に広がる器形で、口縁に隆起帯の段がないタイプが増えてくる。最後のS12には小型のものしか存在しない。長胴甕の変化も坏の流れとは矛盾せず、S1からS2、S4、S5という順序が想定できる。ただし、S3の長胴甕はこの流れの上にはない。だが、S3とS4の坏は同種で、須恵器も類似しているのと同じ段階であると考えられる。S3は系統の異なる集団の土器である可能性が高い。

札幌市では層位的に発掘された遺跡が近年増加している。また、石狩低地帯ではB-Tmが確認される遺跡が多い。K435遺跡ではS2・S3期の住居はS5・S7期の住居よりも下層から掘り込まれているためにより古い。K39遺跡北11条地点（札幌市教育委員会1995）ではS5からS8、K39遺跡長谷工地点ではS4・S7、K39遺跡第6次調査ではS3からS10までが若干の混在はあるものの、層位的に調査されている。末広遺跡ではS6の住居覆土にB-Tmが堆積し、S7の土器がB-Tmより上位で出土する。K39遺跡長谷工地点ではS7がB-Tmより上位で出土、K39遺跡第6次調査第50号竪穴住居跡もS7にあたるが、B-Tmを掘り込んで作られている。上の順序は層位的に確認されたとし、以下S1をS1期、S2をS2期、S3・S4をS3/4期、S5をS5期というように呼び換える。

3 小平町・苫前町

日本海沿岸北部では河川ごとに集落が位置していた。この中で、173軒の住居が発掘された小平町高砂遺跡（小平町教育委員会ほか1983a；1983b）、87軒の住居が発掘された苫前町香川三線遺跡（苫前町教育委員会1987）を取り上げる。

擦文土器の編年と地域差について

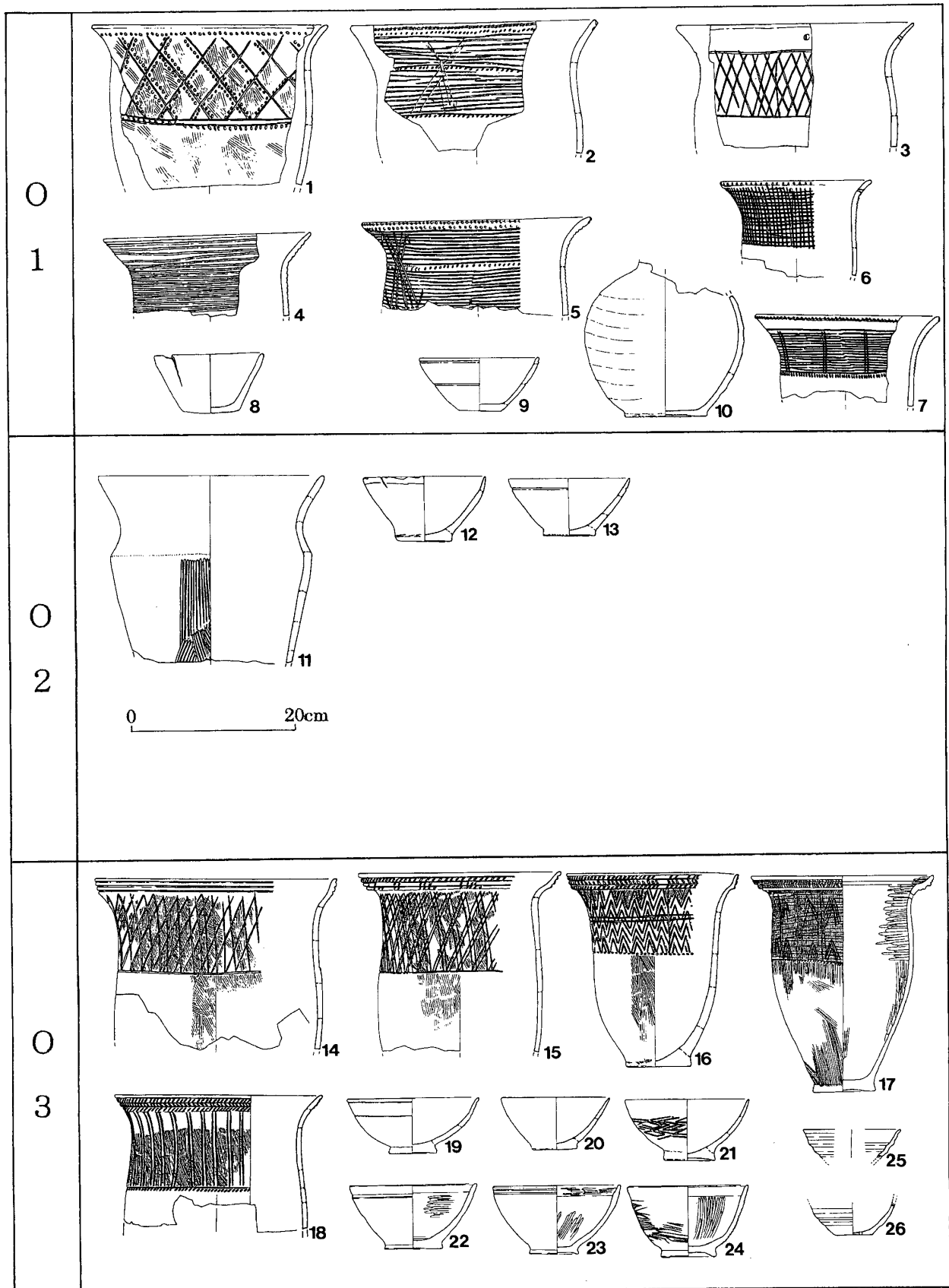


図11 小平町・苫前町の土器 (1)

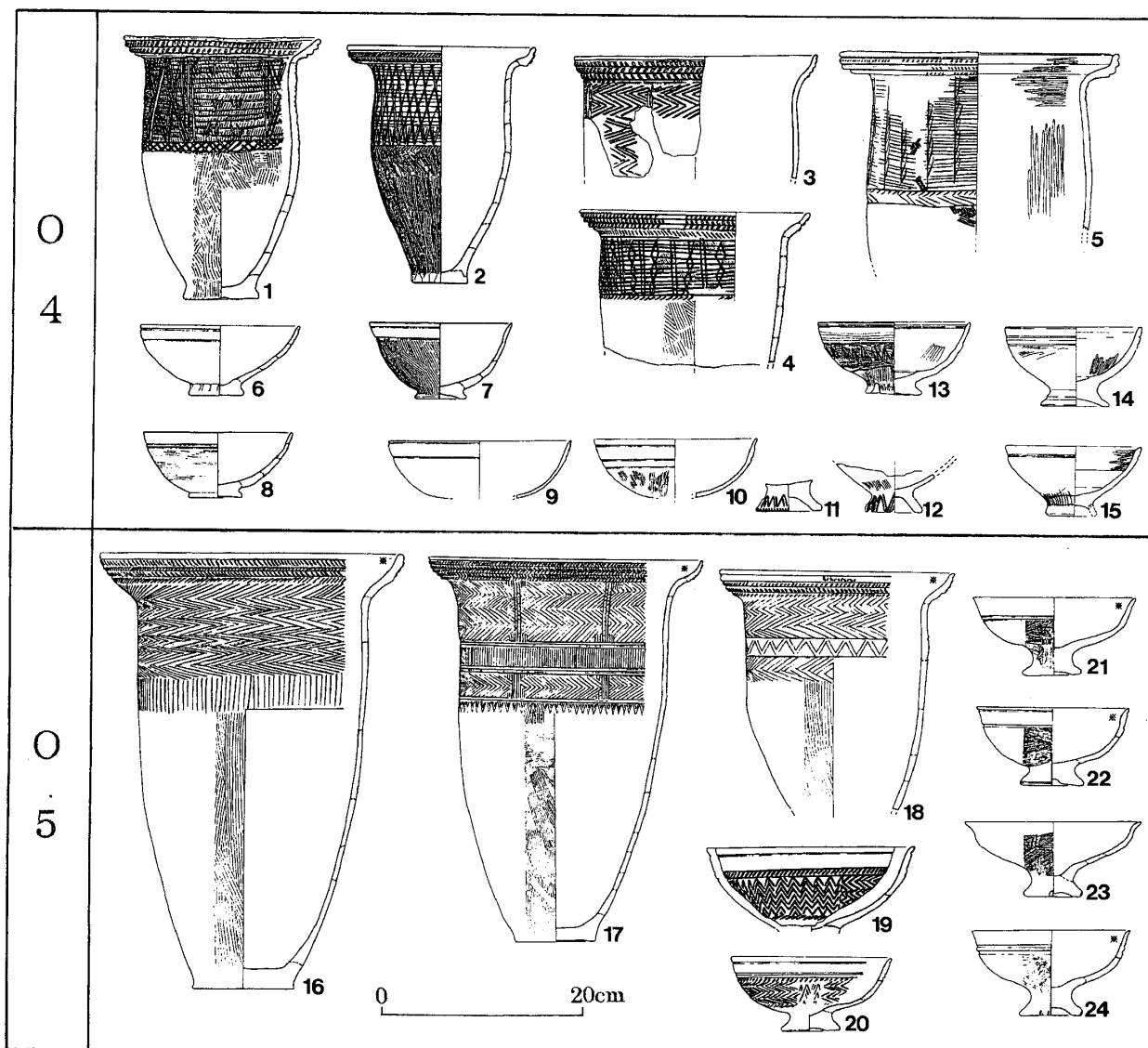


図12 小平町・苦前町の土器 (2)

○1 高砂遺跡 BH - 50・68出土土器を基準とする (図11-1~10)。

組成 長胴甕・坏 D 2。須恵器。

坏 口縁・体部に沈線を持つものがある。内面黒色処理される。

長胴甕 形態Ⅱ 口辺部 a・b i。文様 b・b + c 1 + j 1・b + f 1 + j 1・f 2 + j 2 など。調整はミガキ。

○2 高砂遺跡 BH - 32出土土器を基準とする (図11-11~13)。

組成 長胴甕・坏 E 1。

坏 口縁部に沈線を持つ。

長胴甕 形態Ⅱ 口辺部 a。文様を持つものは不明。調整はハケ。

○3 香川三線遺跡 CH - 53, 高砂遺跡 BH - 55出土土器を基準とする (図11-14~26)。

組成 長胴甕・坏 E 2・坏 F 1。赤焼き土器・須恵器。

坏 体部に綾杉文が描かれるものがある。底面に刻印を持つものが現れる。

長胴甕 形態Ⅱ 口辺部 e iii・f iii。文様は b + d・b + e 1・g 2・h など。地文の横走沈線を持たないものが見られる。

○ 4 高砂遺跡 AH - 3・BH - 58, 香川三線遺跡 CH - 16出土土器を基準とする (図12-1~15)。

組成 長胴甕・坏 E 2・坏 F 1・坏 F 2・坏 F 3。須恵器。

坏 平底から高い上げ底まで形態にバラエティーがある。坏 F 3は底部に鋸歯文を持つものが多い。

長胴甕 形態Ⅱ 口辺部 f iii。文様は二つのタイプがある。一つは横走沈線の地文に持ち, d・f 2が重ね描きされるものと, 横走沈線がなく g 2・h が単独で描かれるものである。後者の比率が高くなる。

○ 5 高砂遺跡 AH - 106・113・BH - 35出土土器を基準とする (図12-16~24)。

組成 長胴甕・高坏 B。搬入土器は見られない。

高坏 裾部は軽い上げ底である。体部に綾杉文が施されたものも多い。

長胴甕 形態Ⅱ・Ⅲ 口辺部 f iii。形態Ⅱは少ない。横走沈線によって文様が区切られ, 複段となる。間に e 1・f 2・h などが描かれる。内面はていねいに磨かれ, 黒色処理されるようになる。

○ 1から○ 3までは石狩低地帯の変化と類似している。○ 4では坏 E 2 (6・8・13), 坏 F 1 (7), 坏 F 2 (14), 坏 F 3 (11・12・15) が見られ, 種類が多い。これはこの時期に急速に底部が発達していく過程を示しており, ○ 5の高坏 Bへと移行する。また, ○ 4の長胴甕の中には文様帯最下段に別系統の文様が狭い幅で描かれているものがある (1・5)。こういった区画が多段化して, ○ 5で複段の文様になったと考える。日本海沿岸北部に特徴的な文様とされる綾杉文は (天野1987; 中田1996), ○ 3から見られ (16), ○ 4で増加し, ○ 5でも主体的に用いられる。このように, 高坏, 長胴甕の複段の文様・綾杉文は日本海沿岸北部で出現したと想定できる。これらは他の地域に大きな影響を与えた。

層位的にこの流れを確認する例は少ないが, 以下○ 1を○ 1期, ○ 2を○ 2期などと呼び換える。

4 常呂町

常呂川の河口部に位置し, 史跡常呂遺跡には1000以上の竪穴住居のくぼみが残っている。東京大学・常呂町教育委員会によって調査が続けられ, 道内でも資料が蓄積された場所の一つである。

○ T 1 栄浦第二遺跡 (常呂町教育委員会1995)・トコロチャシ跡遺跡 1号竪穴 (東京大学文学部1964) 出土土器を基準とする (図13-1・2)。

組成 長胴甕。

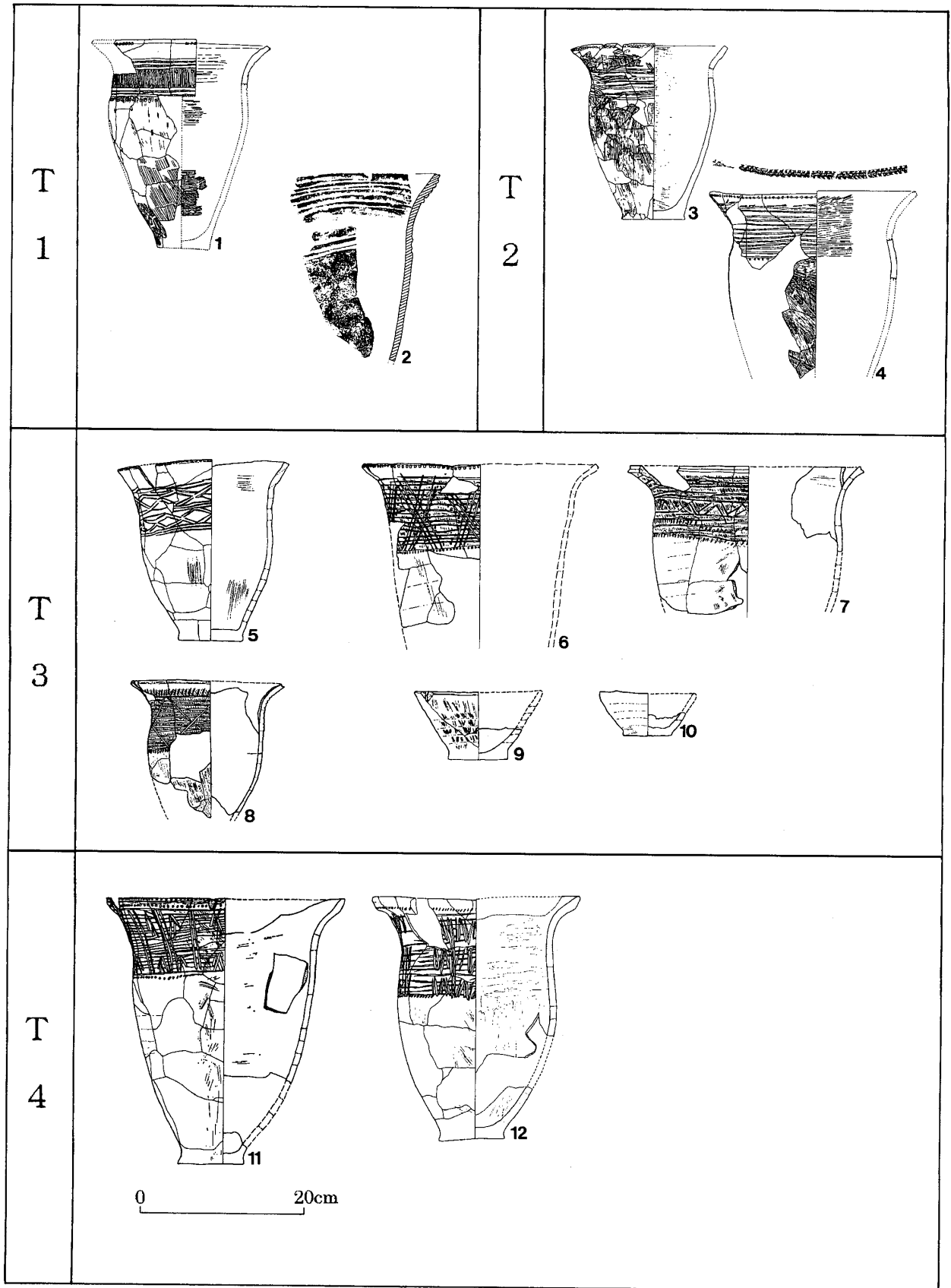


図13 常呂町の土器 (1)

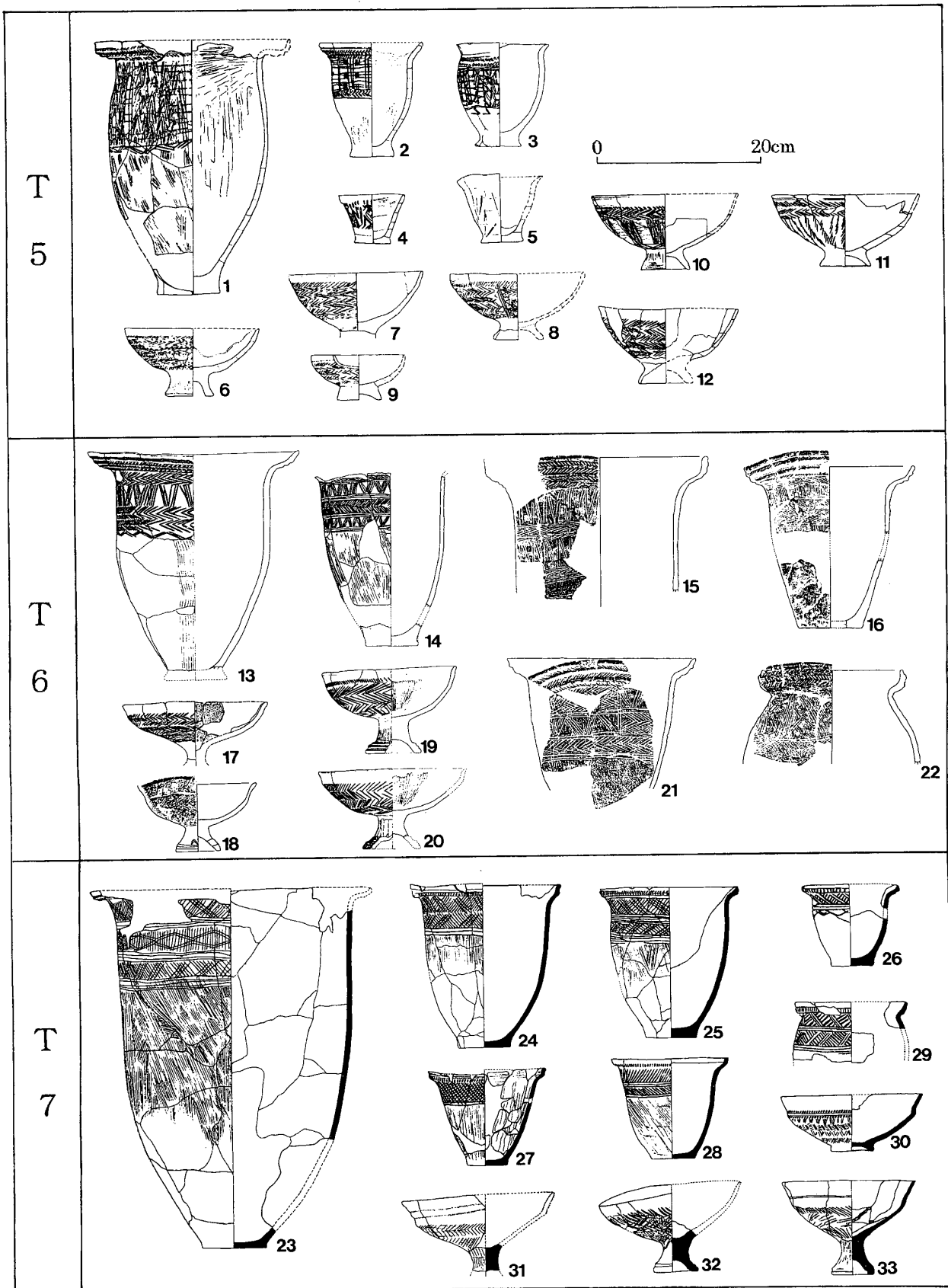


図14 常呂町の土器 (2)

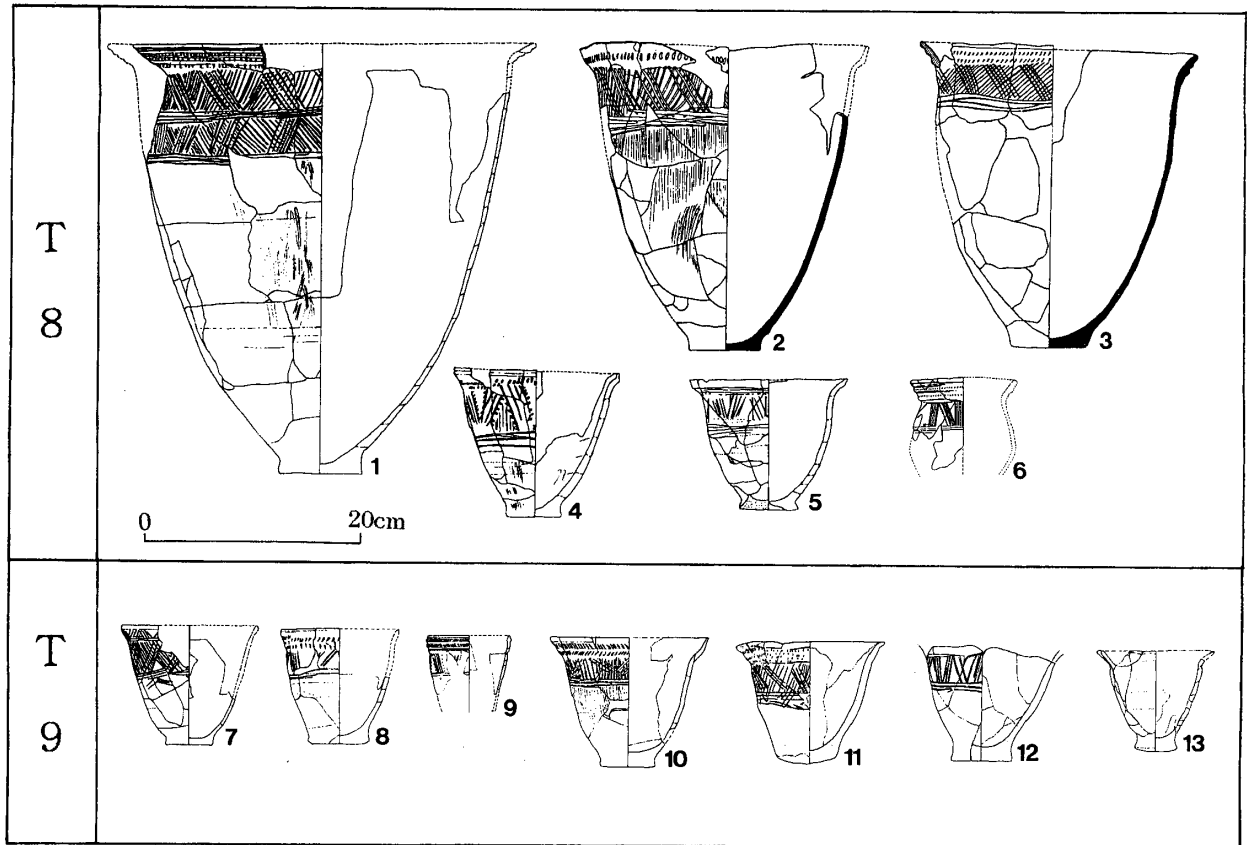


図15 常呂町の土器 (3)

長胴甕 形態Ⅰ 口辺部 b i · c。頸部の段はごく弱い。キザミは数個一単位で、間隔をあけている。文様は a で、沈線の幅は広く浅い。沈線の上下に先の丸い工具による刺突を持つものがある。調整はハケで、擦痕は細かい。

T 2 史跡常呂遺跡 (ST - 06) 6号住居 (常呂町教育委員会1993)・栄浦第一遺跡28号竪穴 (常呂町教育委員会1995) 出土土器を基準とする (図13- 3・4)。

組成 長胴甕。

長胴甕 形態Ⅱ 口辺部 b i。文様は b · b + j 1。

T 3 岐阜第二遺跡1号竪穴B号床面・栄浦第二遺跡7号住居 (東京大学文学部1972) 出土土器を基準とする (図13- 5~10)。

組成 長胴甕・坏 E 1。

坏 粘土帯の接合痕がよく残る。ススが付着するものがある (9)。

長胴甕 形態Ⅱ 口辺部 c i。文様は b + f 2 + j 1 · b + i など。

T 4 岐阜第二遺跡11号竪穴下層床面・栄浦第二遺跡9号竪穴 (東京大学文学部1972) 出土土器を基準とする (図13- 11・12)。

組成 長胴甕。

長胴甕 形態Ⅱ 口辺部 d ii。文様は b + d + j 1。

T 5 岐阜第二遺跡 8・16号竪穴（東京大学文学部1972）出土土器を基準とする（図14-1~12）。

組成 長胴甕・坏 F 3・鉢。

坏 綾杉文が描かれ、口辺部の無文部の幅が狭い。内面黒色処理される。

長胴甕 形態Ⅱ 口辺部 f iii。文様は b + d で、ぎっしりと描かれる。

T 6 常呂川河口遺跡15号竪穴（常呂町教育委員会1996）・TK67遺跡1号竪穴（常呂町教育委員会1988）出土土器を基準とする（図14-13~22）。

組成 長胴甕・球胴甕・高坏 C。

高坏 裾部には隆起帯により段が作られ、キザミが施される。文様は丁寧な綾杉文である。口辺部の無文部分の幅は狭い。

長胴甕 形態Ⅲ 口辺部 f iii。文様には2種類あり、横走沈線により文様帯が区切られ、間に e 1・h が描かれるものと、区画する沈線はないが、文様の種類・向きで区分できるものである（13）。

調整はミガキが増え、内面黒色処理されるものが現れる。

球胴甕 中型のもので、口縁部は内湾し、矢羽状のキザミをもつ。文様は複段である。

T 7 柴浦第二遺跡1号竪穴（東京大学文学部1963）出土土器を基準とする（図14-23~33）。

組成 長胴甕・球胴甕・坏 F 1・高坏 D。

坏・高坏 裾部の段は一段で、キザミを持つものは少ない。文様はやや粗雑となる。口辺部の無文部分の幅は広い。

長胴甕 形態Ⅲ 口辺部 g iii。口辺部は小さくなり、底部も小さく安定が悪い。文様は横走沈線で区画され、間に描かれる文様は g 1 が主体である。施文の順序は上から順で、先に横走沈線を引くわけではない。

球胴甕 小型で、口辺部に短刻線を持つ。複段の文様である（29）。

T 8 朝日トコロ貝塚 F トレンチ内竪穴（東京大学文学部1963）・ワッカ遺跡第4号竪穴（東京大学文学部1972）出土土器を基準とする（図15-1~6）。

組成 長胴甕・球胴甕。坏は見られない。

長胴甕 形態Ⅲ・Ⅳ 口辺部 h iii・h iv。キザミは刺突に近くなり、同じ傾きとなる。底部は小さく、内面が丸いものが増える。文様は g 1 の下に横走沈線を引く1段のものが主体となり、複段のものは少ない。順序は横走沈線が最後で、沈線は細く深い。

球胴甕 小型で、文様は一段となる。

T 9 ワッカ遺跡9号竪穴、岐阜第二遺跡 W 8号竪穴（東京大学文学部1972）出土土器を基準とする（図15-7~13）。

組成 小型の長胴甕のみ。

長胴甕 形態Ⅳ 口辺部 h iv・h。底部は底が平らでないために立たないものもある（11）。文様は粗雑な g 1・e 1 + j 2。

T 5の坏F 3はT 6になると柱状の脚部を持つ高坏Cに発展する。坏部底面が平らで、口辺部無文部分の幅が狭かったものが、T 7では脚部が長く、坏部底面が尖り気味になり深く、口辺無文部の幅が広い高坏Dに変化する。T 8以降は坏・高坏は見られない。長胴甕は基本的に石狩低地帯と同じ変化である。T 1・T 2の角張っていた口縁がT 4から立ち上がり始め、T 5・T 6で最大となった後、T 7で小さくなり、T 8で単純に外反するようになる。文様はT 1・T 2の横走沈線からT 3で重ね描きされるようになり、T 5で最も複雑になる。T 6からは典型的な複段の文様となり、1段の文様が主体となるT 8・T 9となる。T 9になると大型の長胴甕が見られない。このようにT 1からT 9という流れが想定できる。

藤本強氏は岐阜第二遺跡の堅穴・盛土の切り合い関係から堅穴の新旧を分析した(藤本1972a)。それによるとT 8である2号堅穴はT 6である5号堅穴よりも新しく、T 9である9号堅穴はT 8である10号堅穴よりも新しく、T 8である13号堅穴はT 5である16号堅穴よりも新しい。一部のみではあるが上の流れを支持している。以下、T 1をT 1期、T 2をT 2期というように呼び換える。

5 松前町・奥尻町

松前町の札前遺跡(松前町教育委員会1985)の発見から、この地域にも大集落が存在することが明らかになった。資料数が少ないためにやや距離があるが、奥尻島もまとめて分析する。札前遺跡では住居が浅く、奥尻島青苗遺跡は貝塚のため遺物のまとまりを捉えることが難しい。また、この地域では坏の形態変化が小さいため、段階を分けるに際して長胴甕の形態・文様を基準にした。

M 1 松前町大尽内遺跡(松前町教育委員会1975)出土土器を基準とする(図16-1~8)。

組成 長胴甕・鉢。須恵器。

長胴甕 形態I 口辺部b。口辺部に沈線が1本引かれるもの以外無文である。調整はハケ。

M 2 札前遺跡7号住居出土土器を基準とする(図16-9~11)。

組成 長胴甕・坏F 1。

坏 底部はしっかりと張り出し、軽い上げ底となる。底面に刻印を持つ。細い沈線が7本も引かれる。

長胴甕 形態III 口辺部c。底部は小さく、文様はaで、幅の広い沈線である。調整はハケで、工具は幅広、擦痕は粗い。明るい色調の土器である。

M 3 札前遺跡第15・21号住居址出土土器を基準とする(図16-12~27)。

組成 長胴甕・坏E 2・坏F 1・坏F 2・取手付き土器。赤焼き土器・須恵器。

坏 底部の形態がバラエティに富む。平底のもの(24・25)、やや上げ底になるもの(21・22)、分厚いもの(25・27)、薄いもの(22・24)が見られる。刺突が施されたものも若干見られる。底面に刻印を持つものが多い。

長胴甕 形態II・III 口辺部a・c。鋸歯文が描かれるものがあるが、沈線は太く、浅い。

擦文土器の編年と地域差について

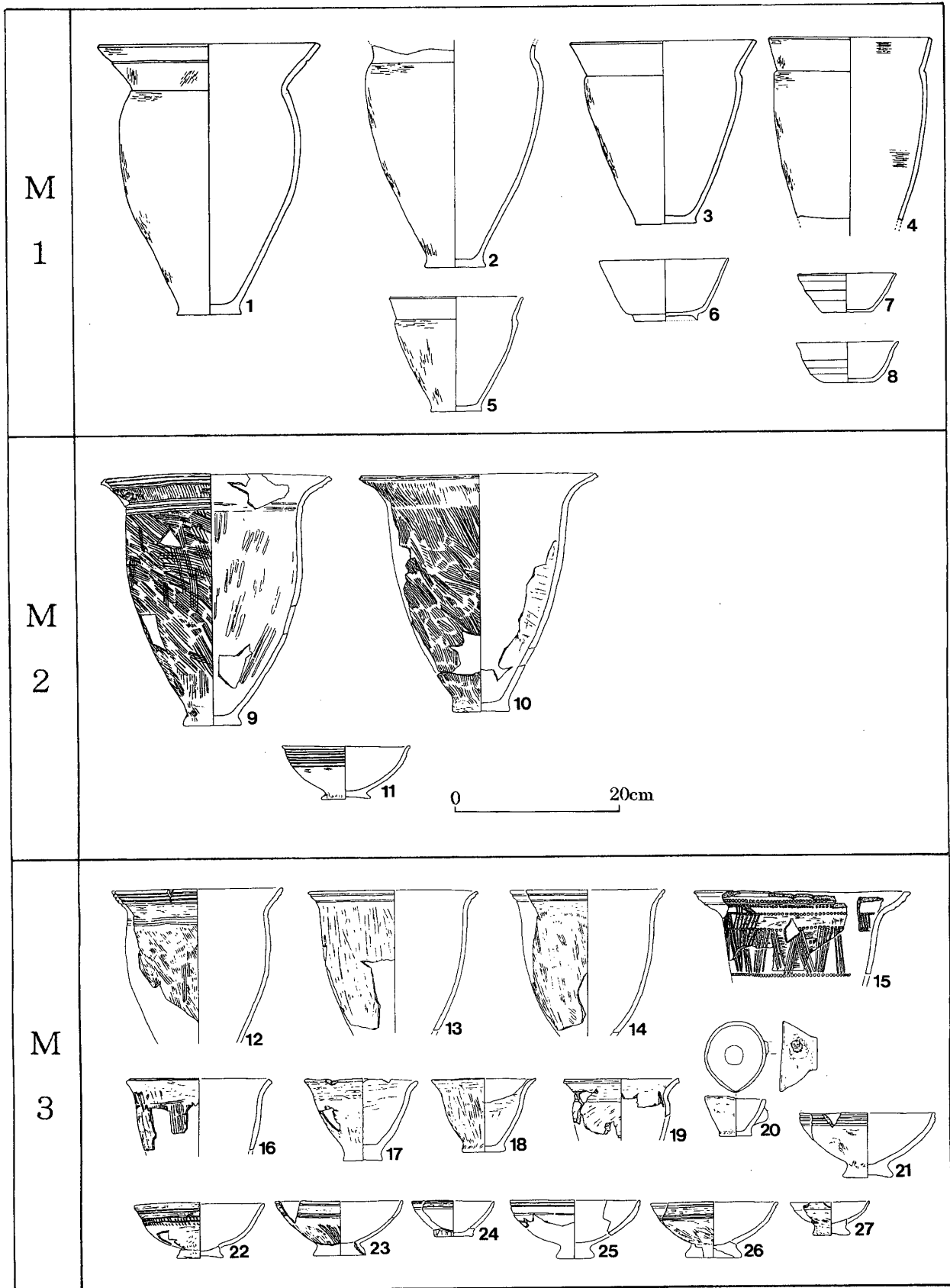


図16 松前町・奥尻町の土器 (1)

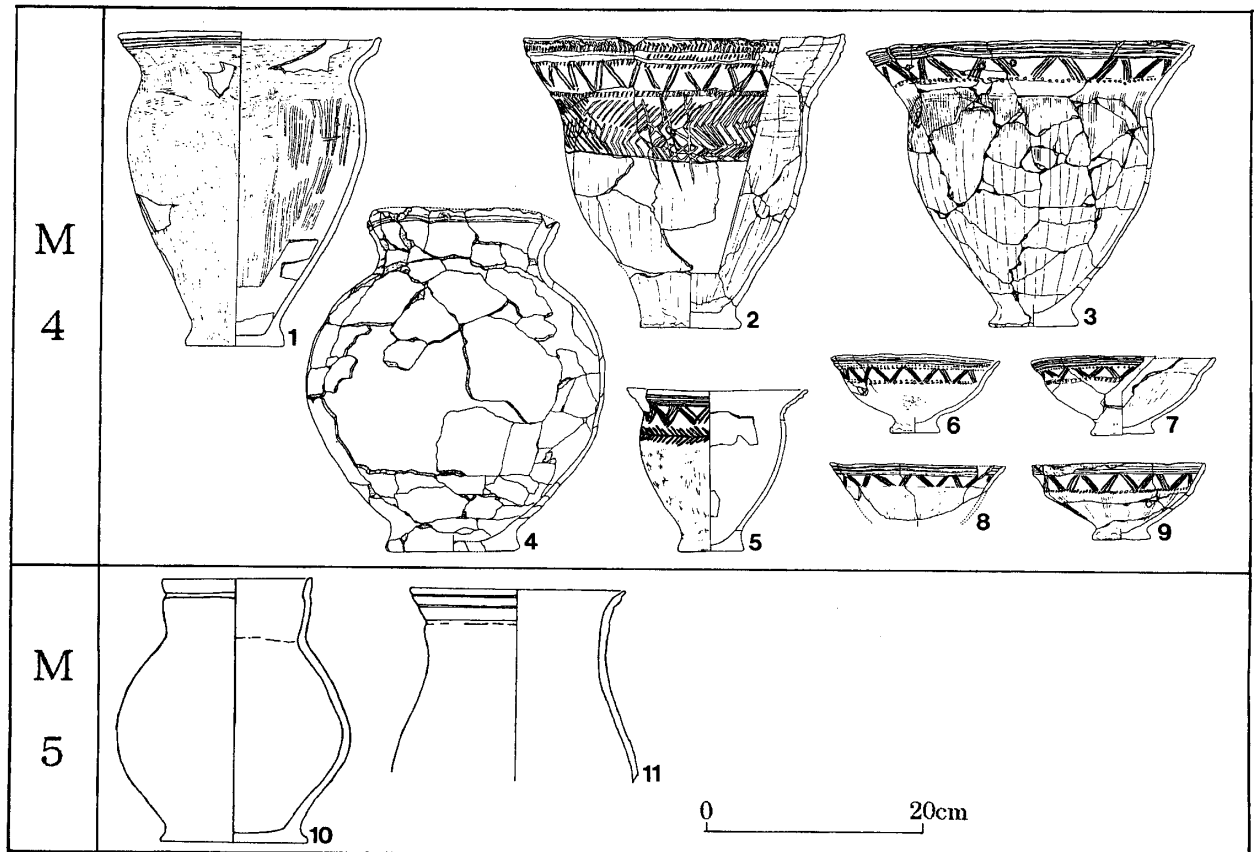


図17 松前町・奥尻町の土器 (2)

M 4 札前遺跡第12号竪穴住居，奥尻町青苗遺跡（奥尻町教育委員会1981）出土土器を基準とする（図17-1～9）。

組成 長胴甕・球胴甕・坏E 2・坏F 1。

坏 平底のものと軽い上げ底のものがある。底部内面は丸く押し窪められている。口縁部の沈線のほか，刺突と鋸歯文を持つ坏が多い。

長胴甕 形態Ⅱ，口辺部 a・b。器高に比べて，口径が大きく，胴部に丸みを持つ。文様は口縁部に沈線が引かれるほか，e 1 が描かれる。e 1 の施文される場所は口辺部で，施文具の先は鋭い。刺突を持つものも多い。調整はケズリに近いハケ，擦痕の細かいハケ，ミガキなどバラエティーに富む。

球胴甕 胴部は球形で，底部は大きい。口縁部に沈線をもつ。

M 5 奥尻町青苗遺跡（宇田川2000；北海道開拓記念館1999）出土土器を基準とする（図17-10・11）。

組成 特異な形態であるが，球胴甕としておく。ほかは不明。

球胴甕 口縁部に沈線が引かれる。なで肩で，胴部に丸みを持ち，最大径はやや下部に位置する。底部が大きく，内面は平らである。ハケのちケズリを行っている。焼成は良好で，やや青みがかかる。

M 2以降の坏は形態に大きな変化がない。ただ、M 2の底部は薄いですが、M 3になると底部が厚いものが増え、M 4には体部中央で立ち上がり、鋸歯文・刺突などの文様を持つものが増加するという傾向がある。M 1の長胴甕は頸部に段を持ち、口縁が角張るので最も古い段階であろう。さらに、くびれを持たないM 2から、M 3、M 4とくびれが強くなり、胴部に丸みを持つように変化していく。また、新しくなるほど鋸歯文を中心とした文様を持つものが増える。青苗貝塚と札前遺跡の土器を比較すると青苗のものが文様を持つ割合が高く、胴部の張りが強いものが多い。これは青苗の方が新しいという時期差である。M 5は位置付けが難しいが、器形・焼成からはM 1-M 4という流れに入れることはできない。M 4の次の段階と考えておく。

札前遺跡ではM 2の第7号住居が第14号住居に切られており、その覆土からM 3が出土していて、M 2の方が古いことが分かる。一部のみしか確認できなかったが、以下M 1をM 1期、M 2をM 2期というように呼び換える。他の地域の土器の変化とは大きく異なっていることが分かる。なお、札前遺跡ではすべての遺構がB-Tmを切っており、これよりも新しいとされる。

6 対応関係

見てきたように、捺文土器は若干の地域差はあれ、全道的に同じ変化を遂げている。このため、坏・長胴甕を比較することで各地域間の編年の対応関係を考えることができる。

石狩低地帯の土器を基準として比較していく。小平町・苫前町は坏D 2が共通することからO 1期がS 5期に、坏E 1が共通することからO 2期がS 6期に、坏E 2と坏F 1、体部に文様が描かれるものが多いことからO 3期がS 7期にそれぞれ対応する。長胴甕も、重ね描きされる文様が複雑になり、口辺部が立ち上がっていく点が共通しており、対応関係に問題はない。次に、口辺部がはっきりと立ち上げられ、重ね描きされる文様が非常に複雑な長胴甕からO 4期がS 8期に、高坏Aと長胴甕の複段文様の出現からO 5期がS 9期に相当する。脚部が発達し、坏部が深くなる坏Dは見られないので、S10期に対応する段階はない。

T 1期は長胴甕の横走沈線が上下に分かれ、口縁部のキザミに間隔があくことからS 3/4期に、T 2期は口頸部に横走沈線がびっしりと引かれる長胴甕からS 5期に、T 3期は坏E 1が共通することからS 6期に対応する。T 4期は口辺部が軽く立ち上げられ、キザミが口縁端部から下がっている長胴甕からS 7期に、T 5期は口辺部がはっきりと立ち上がり、横走沈線に重ね描きされる複雑な文様の長胴甕、坏F 3からS 8期・O 4期に当たる。T 6期は長胴甕の複段文様、高坏の出現からS 9期・O 5期に、T 7期は脚部が長く、坏部が深い高坏DからS10期に、T 8期は高坏が消滅し、長胴甕の文様が1段であることからS11期に、T 9期は小型の甕しか存在しない段階であることからS12期に対応する。

松前町・奥尻町の土器は独自性が強いために比較が難しい。M 1期は長胴甕の頸部にはっきりとした段を持ち、S 1期からS 3/4期まで対応する可能性があるが、共伴する須恵器が糸切底で器高が高く、新しい特徴を持つので(小松1989)、S 3/4期に併行すると考える。札前遺跡はすべ

ての遺構がB-Tmを切り、これよりも新しいのでS7期・O3期以降となる。M3期からM4期の土器が出土する松前町原口館遺跡（松前町教育委員会1993）ではキザミの施されたはっきりと立ち上がる口辺部、綾杉文・貼付囲繞帯文様を持つ長胴甕の破片が出土し、これは石狩低地帯のS9期に相当するであろう。青森県碓ヶ関村古館遺跡（青森県教育委員会1980）ではM4期の長胴甕と類似する資料が出土している。この遺跡の年代観とも合わせると、M4期がS9期に相当することとなる。これからM2期はS7期に、M3期はS8期に対応することとなる。また、底面刻印坏に示されるように日本海沿岸北部と強いつながりがあった道南部の集団が、日本海沿岸北部で土器を使用しなくなった後も、土器を使い続けたとは考えにくいので（瀬川1996）、M4期がO5期（つまりS9期）に相当する根拠の一つとできよう。ただし、奥尻島ではM5期まで土器の製作は続く。周辺では類似する土器はまったくないが、M5期のヘラケズリの調整がM4期と共通し、青苗遺跡という同じ遺跡から出土していることを考えると、M4期の直後にしか当てはめることができず、S10期に当たる。類例が少なく、長期間存続したと考えられない。

以上をまとめると、同段階と考えられる区分が11存在する。つまり、1番目はS1期、2番目はS2期、3番目はS3/4期・T1期・M1期、4番目はS5期・O1期・T2期、5番目はS6期・O2期・T3期、6番目はS7期・O3期・T4期・M2期、7番目はS8期・O4期・T5期・M3期、8番目はS9期・O5期・T6期・M4期、9番目はS10期・T7期・M5期、10番目はS11期・T8期、11番目はS12期・T9期である。以下、この区分を1期から11期と呼ぶ。まとめたものが表1である。

表1 地域間の対応

	札幌・恵庭・千歳	小平・苫前	常呂	松前・奥尻
1期	S1			
2期	S2			
3期	S3/4		T1	M1
4期	S5	O1	T2	
5期	S6	O2	T3	
6期	S7	O3	T4	M2
7期	S8	O4	T5	M3
8期	S9	O5	T6	M4
9期	S10		T7	M5
10期	S11		T8	
11期	S12		T9	

7 年代

以上のように擦文土器を11段階に分けた。次にその年代を考えるわけであるが、これにはいくつかの方法がある。一つは東北の土師器と比較することである。ただし、4期以降は北海道と東北とが異なった発展を遂げるために、直接対比できるのは3期までである。これ以降は擦文土器に伴うロクロ土師器や須恵器の年代観、また青森県で出土する擦文土器を用いることとなる。青森県の土師器の編年については櫻井清彦氏の研究(櫻井1958)以降、全般にわたる三浦圭介氏(三浦1994)・工藤清泰氏(工藤2000)・齋藤淳氏(齋藤2001)のもの、初期に関する宇部則保氏(宇部1989)・新山隆男氏(新山1999)のもの、終末期に関する木村高氏(木村1998)のものなどがある。

もう一つは火山灰の降下年代である。擦文時代の半ばに東北北部から石狩低地帯にかけて広く認められるB-Tmの降下があった。この年代にはいくつかの説があるが⁸⁾、最近の研究では10世紀の第二四半世紀代におさまり、ここでは10世紀中葉開始ごろと考えておく。また、銅銭・湖州鏡などの遺物も参考として用いる。

1期の坏Aは丸底、体部中央に段を持ちそこから大きく広がるという点で、宇部編年のI群土器に当たる。これは7世紀前葉から中葉とされ、氏家編年(氏家1957)栗圀式の古段階に相当する。1期は7世紀前葉から中葉とする。2期の坏Bは平底風丸底の形態が宇部編年II群土器に当たる。これは7世紀後葉から8世紀前葉とされ、氏家編年栗圀式新段階から国分寺下層式初期段階に相当する。2期は7世紀後葉から8世紀前葉とする。3期の坏D1・坏D2は平底になり、ロクロ土師器が伴わない点で宇部編年III・IV群に当たり、これは8世紀中葉から後葉とされる。3期は8世紀中葉から後葉とする。北海道式古墳の時期は副葬された土器から2・3期を中心に4期にも多少入ると考えている。蕨手刀も副葬され、銅銭「和同開珎」が伴ったとされる。前者は7世期末から9世紀の幅を持つが(高橋1996;八木1996など)、後者は初鑄年が708年で用いられたのはほぼ8世紀代に収まると考えられているので(伊藤1968)、上の想定には矛盾はない。

4期はロクロ土師器が出現するが、東北北部にロクロ土師器がもたらされたのは9世紀初頭である(櫻井1958;田中1964)。4期は9世紀前葉から中葉とする。5期はB-Tm降下前であることから9世紀後葉から10世紀前葉とする。6期はB-Tm降下後であることから10世紀中葉から後葉とする。ウサクマイN遺跡(北海道埋蔵文化財センター2001)ではIH-9周辺から横走沈線が口頸部にびっしりと引かれた4期と想定できる長胴甕片とともに、818から834年にかけて鑄造された銅銭「富寿神宝」が出土している。これは摩滅があまりなく、鑄銭からあまり時期を経ずに北海道に持ち込まれたと考えられており(田中2001)、年代に問題はない。

青森県の蓬田村小館遺跡(櫻井1971)・大館遺跡(佐々木1983;櫻井・菊池編1987)・浪岡町高屋敷館遺跡(青森県教育委員会1998)・古館遺跡といった古代防御性集落で、口辺部が立ち上がり、綾杉文・貼付圀繞帯を持つ石狩低地帯に分布の中心を持つ長胴甕と、胴部に丸みを持ち、口縁部に沈線、鋸歯文を持つ道南日本海側に分布の中心を持つ長胴甕が出土している。これらは7・8期の土器である。古代防御性集落は10世紀半ばから12世紀初頭まで存在したが、中心は11世紀代にあっ

た(三浦1995b; 畠山1998など)。また、五所川原窯の操業が停止するのは11世紀半ばとされる(三浦1995a)。北海道内では7期には須恵器が相伴しているが、8期になるとまったく見られなくなる。こういったことから7期は11世紀前半で、8期が11世紀後半とすることができる。常呂町の遺跡では摩周b火山灰が確認されており、これは今から1000年前の降下であるとされるが(徳井1995)、8期の土器はこれよりも上位で出土しており、問題はない。

9・10・11期の年代については、先に擦文文化の終末年代を考える。釧路市材木町5遺跡で出土した湖州鏡の年代は12・13世紀と考えられており(西1988)、10期の土器が相伴している。札幌市のK36遺跡タカノ地点(札幌市教育委員会1997b)では土器の出土しない竪穴住居から13世紀代とされる漆碗が出土している(永嶋1997)⁹⁾。北海道で最も古い中世陶器は上ノ国町竹内屋敷遺跡の吉岡編年I期後半の珠洲焼壺片であり、12世紀末葉から13世紀初頭に当たり(吉岡1989)、神恵内村観音洞窟では14世紀代とされる珠洲焼播鉢よりも下層でしか擦文土器は出土していない(石附1976・吉岡1989)。直接年代を示す資料はないが、擦文土器の製作の終了が本州製品の導入の増加によるものであるというこれまでの認識に立てば(藤本1982; 瀬川1996など)、13世紀代に擦文時代は終了したと想定できる。つまり、11期は13世紀代と考えることができる。よって、これに先立つ9期を12世紀前半、10期を12世紀後半とする。10期の土器に伴う別海町浜別海遺跡(北地文化研究会1972)出土の宋銭「元豊通宝」は初鑄年が1078年であり年代的に矛盾はない。相伴する土器の時期は分からないが、泊村茶津洞窟遺跡(小樽市博物館1970)でも初鑄年代が11世紀前半の宋銭「皇宋通宝」が出土している。

8 他の編年との対比

これまでの全道的な編年との対応関係は表2のようになる¹⁰⁾。1980年以前の研究は宇田川氏のものとするので対比されているので(宇田川1980)、省略した。

地域的なものに関しては、主なものと対比する。根本直樹氏の末広遺跡の編年では(根本1985)、I・II群がS 2期、III群がS 3/4期、IV群がS 5期、V群がS 6期、VI群がS 7期、VII群がS 8期、VIII群がS11期に対応する。中田裕香氏の石狩低地帯の後半期の編年では(中田1990)、第1・2期がS 9期、第3・4期がS10・11・12期に対応する。また、中田氏の日本海沿岸北部の編年では(中田1996)、1 a・1 b期がO 1期、2期がO 2期、3・4 a・4 b期がO 3期、5 a・5 b期がO 4期、6期がO 5期に対応する。藤本氏の常呂町の編年では(藤本1972b)、aがT 2期、bがT 3期、c・dがT 4期、e・f・gがT 5期、hがT 6期、iがT 7期、j・kがT 8期、lがT 9期に対応する。瀬川拓郎氏の道南日本海沿岸の編年では(瀬川1996)、I・IIがM 2期、IIIがM 3期、IVがM 4期に対応する。これらはすべて筆者の判断であり、理解に誤りがあるとすれば、御教示を願いたい。

これまで行われてきた研究における年代観の検討は今回行わない。ただ、終末の時代に地域により若干の差があるという結果は、越田賢一郎氏(越田1997)・澤井玄氏(澤井1998)・瀬川氏(瀬川

擦文土器の編年と地域差について

表2 編年対応表

塚本	宇田川	石附	大 沼	横山	中田他
1期		0・I	三角山D	前期I b	前期
2期			K435C 地区	前期II b	
3期			K435D 地区	前期III	
4期	前期	II	①・②	中期I	中期
5期	III・IV	③・④			
6期		中期	⑤	中期II	
7期	後期	V	⑥	中期III	後期
8期			⑦	後期II	
9期			⑧	後期III	
10期	晩期	VI			
11期					

1996) などと同じである。

IV 分析

1 地域色・系譜関係

時期ごとに、編年を行った場所を中心に、土器を比較することで地域の特徴を明らかにし、系譜関係について考える。土器の地域差を捉えるには¹¹⁾、容易に模倣できる要素である文様と、学習しないと習得できない要素である調整とを同等に扱うことはできない(深澤1986)。ここでは器種構成・調整を中心とし、器形・文様を補助的に用いて分析しているが、違いの示す程度はそれぞれ同じものではない。傾向をつかむことを主眼とし、細かい比較はこれからの課題とする。3・8・10期の様相を図示した(図18~20)¹²⁾。

1期では東北の土器と類似していたが、2期から口縁部にキザミが施されるようになり、4期になると長胴甕の横走沈線に鋸歯文が重ね描きされるようになる。こういった装飾は北海道内に起源を求めるしかなく、北大Ⅲ式土器からの影響であると考えられるが、この問題については北大式土器の編年ともあわせて稿を改めたい。

石狩低地帯では、3期に長胴甕に文様を持たないS3のグループと、横走沈線を持つS4のグループが共存している。前者は前後の流れに乗らないので、系譜を異にする集団によるものである。2・3期では他にも由仁町岩内遺跡(由仁町教育委員会1969)・栗沢町由良遺跡・小樽市蘭島遺跡A地点(小樽市教育委員会1990)などでS3に類似する土器が出土している。こういった文様を持たず、口頸部がはっきりとヨコナデされ、スマートな長胴甕は八戸市櫛引遺跡(青森県教育委員会

1999)など馬淵川下流に類例が多い。S3は周辺よりもより東北とのつながりの強い集団であったと考えられ、2・3期は遺跡間で土器の差が大きかった。4期以降はこういった遺跡はほとんど見られなくなるが、5期のサクシュコトニ川遺跡では坯の半数以上が搬入品のロクロ土師器で、「夷」と考えられる文字を持つ坯(佐伯1986など)や米が出土している。隣接して生活しながらも、東北との関係に差が存在するのはこの時期まで残る。

3期になると石狩低地帯以東でも土器が見られるようになる。常呂町を始め、旭川市緑町4遺跡(旭川市教育委員会1985)・遠軽町寒河江遺跡(遠軽町教育委員会1994)・浦幌町十勝太若月遺跡(浦幌町教育委員会1975)¹³⁾・音別町ノトロ岬遺跡(音別町教育委員会1984)・釧路市幣舞遺跡(釧路市埋蔵文化財調査センター1996;1999)・緑ヶ岡1遺跡(釧路考古学研究会1992)などで出土している。これらは沈線文と刺突文、口縁部のキザミ、半裁竹管による押引文に特徴がある長胴甕である。坯が見られず、器種構成が石狩低地帯とは大きく異なっていた。横走沈線を除く文様は土師器の影響とは考えられず、北大Ⅲ式土器からの伝統であろう。大沼氏は十勝太式という新名称を提示している(大沼1996)。網走市ニツ岩遺跡(北海道開拓記念館1982)ではオホーツク文化貼付文期の住居に伴って出土しており、オホーツク文化との関係を考える必要がある。

4期以降も道東部では坯がほとんど導入されないという違いはあるものの、長胴甕は全道的に石狩低地帯と類似したものが使用される。ただし、道南日本海沿岸では資料がほとんどないものの、横走沈線が発達しないなど他とは異なった変化を始め、6期に続くようである(天野1987)。6期は日本海沿岸で底面刻印坯が出現し、北部では地文の横走沈線を持たない長胴甕が増え始めるなど、7期に先駆ける動きがある。

7期になると各地で地域差が強まり始める。日本海沿岸北部では坯の底部が急速に発達する。口縁部にはほとんど沈線が引かれ、底面に刻印を持つものが多い。長胴甕では文様に地文のない綾杉文・斜格子文のものが多く、調整もハケのみである。8期の大きな指標である高坯・長胴甕の複段の文様はこの地域で生まれたことはすでに述べた。これらは7・8期に他の地域に大きな影響を与えた。道東部で7期に坯F3が導入され、8期に長胴甕の複段文様・内面黒色処理が現れるのは日本海沿岸北部からの影響である。ただし、高坯は脚部が長く、高い上げ底の坯Cであり、口縁部に沈線を持たないなど、独自性はすでにあった。天野哲也氏なども指摘するように天塩川上流の美深町楠遺跡(北海道埋蔵文化財センター1984)・名寄市智東H遺跡(名寄市教育委員会1979)では下流部とは異なり、高坯の脚部が長く、高い上げ底で、口縁部に沈線がないなどオホーツク海沿岸の特徴を持っている(天野1987)。

石狩低地帯で8期に出現する高坯はそれまでの坯とは形態に飛躍があり、この時期に日本海沿岸北部の影響が入ってきたことが分かる。遺跡数が激減する時期と一致していることは興味深い。だが、貼付囲繞帯文様を持つ比率が高まり、文様の重ね描きの伝統は続き、典型的な複段の文様、口縁がはっきりと立ち上げられる長胴甕が少ないなど、逆に石狩低地帯の地域的特色は強まったともいえる。これまで石狩低地帯と同じ特徴を持つ土器が分布していた日高地方では、8期に平取町岩

擦文土器の編年と地域差について

志内遺跡・様似町・えりも町エンルム遺跡（日高管内郷土史研究協議会ほか1967）に見られるように、長胴甕の口辺部がはっきりと立ち上がり、文様も典型的な複段の道東部に類似した長胴甕が見られるようになる。

石狩川上流にも大集落が存在しており、6期以降は日本海側沿岸北部と類似していく。しかし、7期には坏がほとんどF3であり、形態のバリエーションがない点が異なっている。

8期以降、常呂川流域では長胴甕の文様にg1・g2が用いられる例が非常に多い。一方、太平洋岸ではe1・f2に刺突で縁取りされる文様が多く見られる。ただし、こういった傾向は指摘できるものの、どちらの文様も両地域で見られるので強い地域差とはいえないであろう。

道南日本海側では、7・8期に胴部の丸みが強まり、鋸歯文を持つ甕が出現する。ただし、文様を持つ位置がほとんど口辺部であり、頸部・胴部上半に文様を持つ他の地域とは違っている。また、外面の調整がハケのみであることは日本海沿岸北部と似ているが、工具が強く当たりケズリに近いものが見られる点は東北の土師器と類似し、札前遺跡では形態は異なるが取っ手を持つ土器や棒状の支脚など共通する遺物が出土している。地理的に近い東北の影響が大きかったため、強い地域性を示すと考えられるが、土器の形態は東北とは大きく異なっている。B-Tm以降のこういった土器は瀬棚町南川2遺跡（瀬棚町教育委員会1985）から福島町隠内館遺跡（福島町教育委員会1972）まで分布している。

10期以降は石狩低地帯と道東部で土器が使用されるだけである。長胴甕のみの構成、緩やかに広がる器形、1段の文様、ミガキの調整など共通する点も多い。だが、石狩低地帯では貼付囲繞帯文様をほとんどの土器が持っているが、道東では見られず、前段階からの違いが続いている。

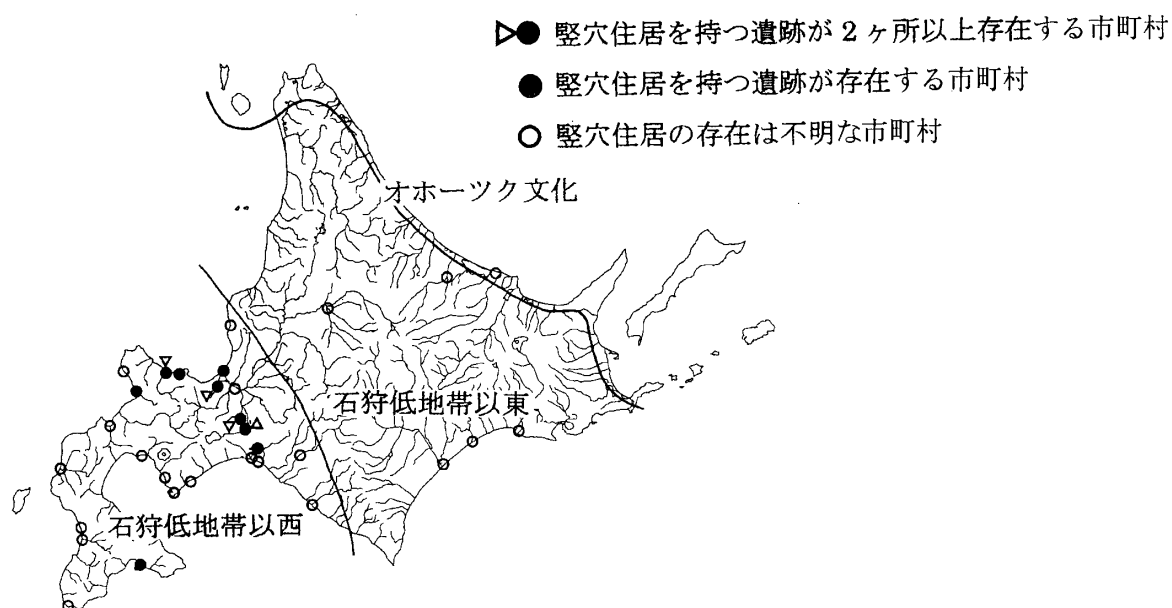


図18 3期の状況

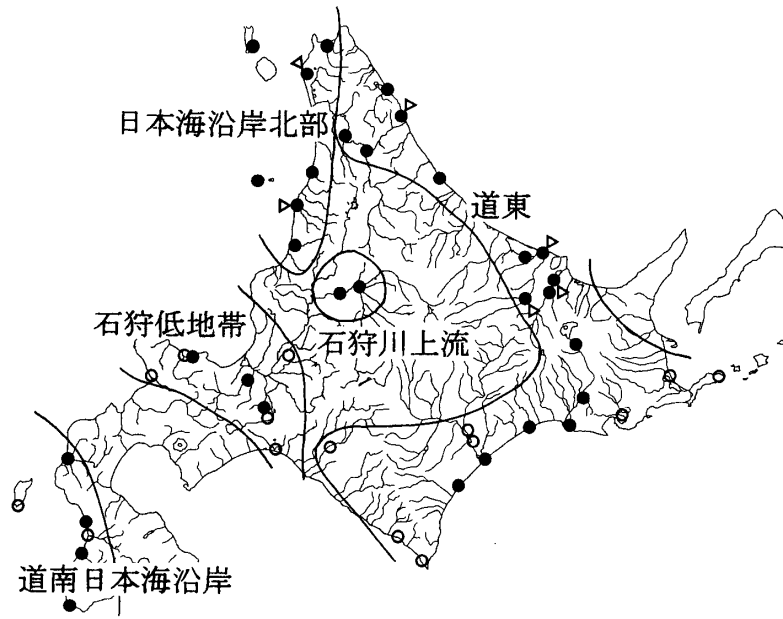


図19 8期の状況

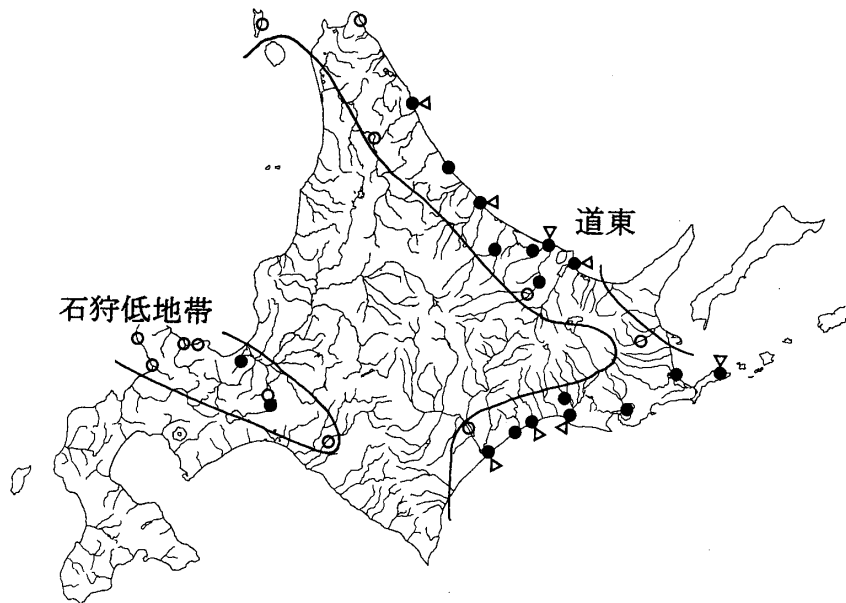


図20 10期の状況

V 擦文土器の画期

擦文土器の画期を指摘し、定義を再考する。北大Ⅲ式土器に関しても簡単に触れることとなる。

6世紀は北大Ⅱ式土器が北海道で用いられていた。これは長胴甕と若干の片口土器・注口土器から構成されている。竪穴住居は見られない。6世紀の終末には縄文は用いられなくなり、北大Ⅲ式土器に変化した。

7世紀になると青森県の馬淵川下流域に南から土師器文化が流入し、ほとんど時間をおかずに北海道にも入ってきた。これは長胴甕・球胴甕・坏から構成され、古墳時代後期土器様式と呼ばれ、東北地方南部と共通している（仲田1997）。かまどを持つ方形の竪穴住居・紡錘車¹⁴・豊富な鉄器を伴い、石狩低地帯に定着した。これは以前とはまったく異なる文化であり、衣食住すべてにわたる大きな変化が起こったと考えられる。さらに、祝梅三角山D遺跡では土製の小玉・勾玉も見られ祭祀に関しても東北の影響が入ってきた。ここに画期を求め擦文時代の始まりとし、これまでの続縄文時代とは区別する。東北と類似する土器を用いているために土師器と呼ぶのが適当であろう（大沼1989；1996；三浦1998など）。ただし、壺¹⁵はまったく導入されず、甌・高坏も少ないなど北海道の独自性はすでに見られた。

同時に、北海道では北大Ⅲ式土器を用いる集団もいた。彼らも7世紀になると坏を使用し始め、長胴甕の器形に変化が見られ、鉄器を豊富に持つようになったことが、余市町天内山遺跡（余市町教育委員会1971）・千歳市ウサクマイA遺跡（ウサクマイ遺跡調査会1975）・恵庭市ユカンボシE7遺跡（北海道埋蔵文化財センター1999）といった墓の副葬品から分かる。こういった変化は土師器文化からの影響であるので擦文文化ととらえる。この認識は高杉博章氏の「すでに続縄文文化と土師器文化は相互に関与しあい、アカルチュレーションを開始していたという点において、擦文0及び擦文第1¹⁶に象徴される内容は、もはや続縄文文化とは言い得ず、土師器文化とも言い得ないのであり、あくまで擦文文化の一端として認識されなければならない」（高杉1975：119）という立場に賛同するものである。彼らは土師器を用いる集団とはある程度の距離を保ちつつ、互いに影響を及ぼしあいながら、しばらく存続した。

擦文文化の要素のほとんどはやはり土師器文化に由来し、土器も土師器からスムーズに変化していると考えられる。この点は石附氏・斎藤傑氏の立場（石附1968；1984；斎藤1967）に近い。しかし、北大Ⅲ式土器からの影響力が非常に大きかったと考える点が異なっている。これは両土器の対応関係の違いに基づくもので、くわしくは稿を改める。

4期になるとこれまでである程度類似した土器を用いてきた東北と北海道とで異なった変化を遂げるようになる。東北は長胴甕の口頸部が短く、まったくの無文で、ヘラナデ・ヘラケズリの調整が行われる。これに対して北海道では土器の文様がさらに発達していく。北海道・東北の交流の仕方が変化したことを反映しており、これも大きな画期とすることができる。これ以降を狭義の擦文土器と呼ぶのは、大沼氏や三浦氏と同じ考えである（大沼1989；1996；三浦1994など）。

8期にも大きな画期があった。高坏・長胴甕の複段文様のひろがりであるが、これには日本海沿岸北部の大きな影響があった。また、北海道で搬入土器がまったく出土しなくなり、土器の地域差が強まる時期でもある。土器の変化だけではなく、これ以降石狩低地帯では竪穴住居がほとんど見られなくなる一方で、道東部で遺跡が急増し、集団内にも大きな動きがあったと考えられる。

擦文時代の終末は地域により差があり、日本海沿岸北部・道南日本海側では他の地域に先駆けて土器は製作されなくなっていたが、11期を最後に全域で土器は消滅する。これは本州産製品の流入

の増加の結果であると考えられている。これは生活全体に大きな変化をもたらした（鈴木1994など）。

上に述べたように、擦文時代において1期・4期・8期・11期の画期が特筆に値しよう。もし、大別を行うとすれば、1期から3期、4期から7期、8期から11期の3つに分けることができる。最初は東北からの新しい文化が受け入れられていく時期で、遺跡間で差が見られる。次が北海道の独自性が高まる時期で、最後が地域間での差が広がり、再び大きく文化の変わっていく時期にあたる。これらは本州の動きと連動しており、文献史料に記載された出来事とも密接に関連しているのであろう。

VII 最後に

若干視点をかえて分析を行ったが、結果自体はこれまでと大きく変わるものではなく、最近の意見の折衷となった。研究史はほとんど触れておらず、他氏の意見にも検討を加えることができなかった。また、北大式土器について言及しなかったため、分かりにくくなってしまった部分がある。これらの問題は機会があれば論じたいと考えている。

小論をまとめるにあたっては、宇田川洋先生、熊木俊朗先生をはじめ研究室の諸先生に御指導を受けました。また、以下の方々、機関には資料の実見に便宜を図っていただき、御教示を受けました。末筆ながら記して感謝いたします。

秋山洋司・石井淳・上野秀一・右代啓視・大泰司統・大谷敏三・大西秀之・久保泰・熊木庫一・後藤秀彦・笹田朋孝・鈴木信・仙庭伸久・高瀬克範・武田修・椿坂恭代・豊田宏良・福田正宏・藤井誠二・前田正憲（敬称略・五十音順）

浦幌町教育委員会・札幌市教育委員会・千歳市教育委員会・天塩川歴史資料館・常呂町教育委員会・常呂町遺跡の館・八戸市郷土博物館・北海道開拓記念館・北海道大学埋蔵文化財調査室・北海道埋蔵文化財センター・松前町教育委員会

註

- 1) この問題はかなり複雑な様相を呈しており、稿を改め詳述したい。ご寛恕いただきたい。
- 2) 北大式土器の標識遺跡である北大遺跡の報告はなく、実態が不明で、多くの研究者が北大式の用語を避けてきた（菊池1972a）。大沼忠春氏は北大Ⅲ式土器を十勝茂寄式土器と呼び換えることを提唱しており（大沼1989）、採用する研究者も増えている。しかし、筆者のこの土器の編年的位置付けは大沼氏とは異なっているので、十勝茂寄式の用語はとりあえず用いない。
- 3) 当然こういった特徴が見られないものも多く、特に貼付圍繞帯を持つものは貯蔵に用いられたとされる（豊田1987）。
- 4) 無文土器はその形態から東北の土師器との関係を主張する研究者もいるが（佐藤1972；瀬川1984）、調整や出土状況から見て擦文土器の範疇に入れてよいと考えている。
- 5) これらに加え、口辺部と頸部をあわせた名称として、口頸部の用語を用いる。
- 6) 口辺部形態・文様に関しては藤本氏の分類を参考にした（藤本1972b Fig.294）。

擦文土器の編年と地域差について

- 7) たとえば口辺部形態がfで、隆起帯による段と矢羽根状のキザミを持つ口縁はf iiiと表現する。i～ivの記号がないものは装飾のない口辺部である。
- 8) 町田洋氏・福沢仁之氏は923年～924年、池田まゆみ氏は937年、早川由紀夫氏・小川真人氏は944年～947年に降下年代を想定している（古環境研究所2001）。
- 9) 漆椀自体はウサクマイ C15遺跡で擦文時代前半のものが出土している（北海道埋蔵文化財センター2000）。また、本州産の木製品は高坏という供膳具と置き換わったのであり、高坏が見られなくなっても、長胴甕がまだ残っている可能性がある。つまり、漆椀の出現が、すなわち擦文時代の終末と考えることはできない。この例は可能性の一つとして考えておく。
- 10) 宇田川1980、石附1984、大沼1989・1996、横山1990、中田ほか1999と比較した。大沼編年に関して、土師器は1996年の論文を、擦文土器に関しては1989年の論文を用いた。1989年の論文は土器の番号がミスプリントのため修正している。横山編年は地域ごとに遺跡名が上げてあるが、地域間の対応関係が筆者のものと異なっているために、石狩低地帯の編年を代表させて比較している。
- 11) 土器の地域差が示す意味について考える必要があるだろうが（都出1989；溝口1987など）、今回はこの問題については立ち入らない。
- 12) 道東部の後半期を考える際にトビニタイ文化を無視することはできないが、トビニタイ土器に関しては筆者の検討が不十分のため小論では扱わない。このため、分布の中心、市町村名で言うと斜里町・羅臼町・標津町は分析の対応から除外している。擦文土器との併行関係は菊地氏の編年（菊池1972b）でいうとトビニタイⅡが5～7期、中間的な形態・トビニタイⅠが8～10期に当たる。
- 13) 十勝太若月遺跡の貼付帯・取っ手を持つ土器は特異であるが、沈線文を持つ土器と同様の土壙から出土し、焼成・胎土が似ていることから同じ段階と考えている。
- 14) 札幌市 K135遺跡（札幌市教育委員会1987a）出土の後北 C2・D 式期のものが最も古い資料と考えられるが、十分な量が見られるのは擦文時代からである。
- 15) 小型丸底でていねいに磨かれた器種を指す。
- 16) 筆者註：擦文0が筆者のいう北大Ⅲ式土器、擦文第1が1，2，3期に対応する。

<引用・参考文献>

発掘報告書は基本的に発行機関でまとめ、書名が類似し区別が必要なものの以外はシリーズ名や副題は省略した。

青森県教育委員会 1980 『古館遺跡発掘調査報告書』。

青森県教育委員会 1998 『高屋敷館遺跡』。

青森県教育委員会 1999 『櫛引遺跡』

旭川市教育委員会 1985 『緑町4遺跡』。

天野哲也 1987 「本州北端部は擦文文化圏にふくまれるか」森浩一編『考古学と地域文化』（同志社大学考古学シリーズⅢ）pp.529-544，京都：同志社大学考古学シリーズ刊行会。

新井房夫 1982 「第六節 千歳市末広遺跡におけるごく明粒白色火山灰（苫小牧火山灰）」千歳市教育委員会『末広遺跡における考古学的調査（下）』，487-488。

石附喜三男 1968 「擦文式土器の初現の形態に関する研究」『札幌大学紀要 教養学部論集』1, 1-45。

石附喜三男 1976 「擦文式文化の終末年代に関する諸問題」江上波夫教授古稀記念事業会編『江上波夫教授古稀記念論集 考古・美術篇』pp.29-50，東京：山川出版社。

石附喜三男 1984 「擦文式土器の編年的研究」石附喜三男編『北海道の研究2』pp.127-158，大阪：清文堂出版。

伊藤玄三 1968 「末期古墳の年代について－東北地方末期古墳出土遺物を通して－」『古代学』第十四卷第三・四号，217-244。

塚本浩司

- ウサクマイ遺跡調査会 1975 『烏柵舞』東京：雄山閣。
- 氏家和典 1957 「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯，1-14。
- 宇田川 洋 1980 「7 擦文文化」野村崇・菊池俊彦編『北海道考古学講座』pp.151-182，札幌：みやま書房。
- 宇田川 洋 1986 「擦文文化の刻印記号」『東京大学考古学研究室紀要』第5号，41-72。
- 宇田川 洋 1994 「北方地域の土器底部の刻印記号論」『日本考古学』第1号，155-167。
- 宇田川 洋 2000 『増補アイヌ考古学』札幌：北海道出版企画センター。
- 宇部則保 1989 「青森県における7・8世紀の土師器－馬淵川下流域を中心として－」『北海道考古学』第25輯，99-120。
- 浦幌町教育委員会 1975 『十勝太若月－第三次発掘調査－』。
- 遠軽町教育委員会 1994 『寒河江遺跡』。
- 大井晴男 1984 「擦文文化といわゆる「アイヌ文化」の関係について」『北方文化研究』第15号，1-201。
- 大沼忠春 1989 「北海道の文化」金子裕之編『古代の都と文化』（古代史復元9）pp.174-184，東京：講談社。
- 大沼忠春 1996 「北海道の古代社会と文化－七～九世紀－」鈴木靖民編『古代蝦夷の世界と交流』（古代王権と交流1）pp.103-140，東京：名著出版。
- 奥尻町教育委員会 1981 『奥尻島青苗遺跡』。
- 小口雅史 1999 「防御性集落の時代をどうみるか－南からの力・北からの力 古代文献史学の側からの試論」入間田宣夫・小林真人・斉藤利男編『北の内海世界 北奥羽・蝦夷ヶ島と地域諸集団』pp.114-136，東京：山川出版社。
- 小樽市教育委員会 1990 『蘭島遺跡』。
- 小樽市博物館 1970 「茶津四号洞窟遺跡・発足岩陰洞窟」『小樽市博物館紀要』三号。
- 小平町教育委員会ほか 1983a 『おびらたかさご』。
- 小平町教育委員会ほか 1983b 『おびらたかさごII』。
- 音別町教育委員会 1984 『ノトロ岬』。
- 菊池徹夫 1972a 「擦文式土器基本形態の形成」『北海道考古学』第8輯，63-72。
- 菊池徹夫 1972b 「第三章 第三節 トビニタイ土器群について」東京大学文学部『常呂』，447-461。
- 木村 高 1998 「青森県域における在り土器の編年について－津軽地方・11世紀中葉から12世紀前半－」東北中世考古学会『東北地方の在り土器・陶磁器II』，53-55。
- 釧路考古学研究会 1992 『東釧路第3遺跡・緑ヶ岡1遺跡』。
- 釧路市埋蔵文化財調査センター 1989 『材木町5遺跡発掘調査報告書』。
- 釧路市埋蔵文化財調査センター 1996 『幣舞遺跡調査報告書III』。
- 釧路市埋蔵文化財調査センター 1999 『幣舞遺跡調査報告書IV』。
- 工藤清泰 2000 「第二節 浪岡町の古代遺跡」浪岡町史編纂委員会『浪岡町史』第一巻，pp.533-688。
- 桑原滋郎 1976 「須恵器系土器について」東北考古学会編『東北考古学の諸問題』pp.443-469，東京：東出版東寧社。
- 古環境研究所 2001 「第10章 札幌市K39遺跡第6次調査地点における火山灰分析」札幌市教育委員会『K39遺跡 第6次調査』，117-126。
- 越田賢一郎 1997 「[I] 北海道・東北北部」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集，11-57。
- 小松正夫 1989 「8・9世紀における出羽北半須恵器の特質」『考古学研究』第36巻第1号，67-94。
- 齋藤 淳 2001 「津軽海峡領域における古代土器の変遷について」『青森大学考古学研究所研究紀要』第四号，1-29。
- 斉藤利男 1999 「北緯四〇度以北の十～十二世紀」入間田宣夫・小林真人・斉藤利男編『北の内海世界 北奥羽・蝦夷ヶ島と地域諸集団』pp.4-49，東京：山川出版社。

擦文土器の編年と地域差について

- 斎藤 傑 1967 「擦文文化初頭の問題」『古代文化』第一九卷第五号, 77-84。
- 佐伯有清 1986 「VI-11 刻字土器「夫」の意義」北海道大学『サクシュコトニ川遺跡』, 185-190。
- 櫻井清彦 1958 「東北地方北部における土師器と堅穴に関する諸問題」江上波夫・關野雄・櫻井清彦
『館址-東北地方における集落址の研究-』pp.141-156, 東京:東京大學東洋文化研究所。
- 櫻井清彦 1971 「速報・青森県小館遺跡の調査」『考古学ジャーナル』No.62, 16。
- 櫻井清彦・菊池徹夫編 1987 『蓬田大館遺跡』東京:六興出版。
- 佐々木達夫 1983 「津軽・蓬田大館の発掘-1981年」『日本海文化』No.10, 17-58。
- 札幌市教育委員会 1979 『K446遺跡』。
- 札幌市教育委員会 1980 『K460遺跡』。
- 札幌市教育委員会 1987a 『K135遺跡 4丁目地点 5丁目地点』。
- 札幌市教育委員会 1987b 『K36遺跡』。
- 札幌市教育委員会 1989 『K441遺跡 北34条地点』。
- 札幌市教育委員会 1993 『K435遺跡』。
- 札幌市教育委員会 1995 『K39遺跡 北11条地点』。
- 札幌市教育委員会 1997a 『K39遺跡 長谷工地点』。
- 札幌市教育委員会 1997b 『K36遺跡 タカノ地点』。
- 札幌市教育委員会 1999 『K499・K500・K501・K502・K503遺跡』。
- 札幌市教育委員会 2001 『K39遺跡 第6次調査』。
- 佐藤達夫 1972 「第七章 第四節 擦紋土器の変遷について」東京大学文学部『常呂』, 462-488。
- 澤井 玄 1998 「北海道北東部における擦文文化の拡散と終末について」野村崇先生還暦記念論集編
集委員会編『北方の考古学』pp.383-393。
- 鈴木 信 1994 「中世・近世」『北海道考古学』第30輯, 55-66。
- 鈴木靖民編 1996 『古代蝦夷の世界と交流』(古代王権と交流1) 東京:名著出版。
- 鈴木靖民 1999 「擦文期の北海道と東北北部の交流」『国史学』第一六九号, 57-88。
- 瀬川拓郎 1984 「第IV部 第2章 II類土器について-擦文土器にともなう無文土器-」旭川市教育
委員会『錦町5遺跡』, 180-184。
- 瀬川拓郎 1989 「擦文時代における食糧生産・分業・交換」『考古学研究』第36巻第2号, 72-97。
- 瀬川拓郎 1996 「擦文文化の終焉」『物質文化』61, 1-17。
- 瀬棚町教育委員会 1985 『南川2遺跡』。
- 仙庭伸久 1993 「VII 第2章 土器群について」札幌市教育委員会『K435遺跡』, 394-440。
- 高杉博章 1975 「擦文文化の成立とその展開」『史学』47-1・2, 99-131。
- 高橋信雄 1996 「蝦夷文化の諸相」鈴木靖民編『古代蝦夷の世界と交流』(古代王権と交流1) pp.
319-354, 東京:名著出版。
- 田中哲郎 2001 「V 成果と問題点」北海道埋蔵文化財センター『ウサクマイN遺跡』, 287-290。
- 田中 琢 1964 「須恵器製作技術の再検討」『考古学研究』第11巻第2号, 1-7
- 玉口時雄・小金井靖 1984 『土師器・須恵器の知識』(基礎の考古学) 東京:東京美術。
- 千歳市教育委員会 1978 『祝梅三角山D遺跡における考古学的調査』。
- 千歳市教育委員会 1981 『末広遺跡における考古学的調査(上)』。
- 千歳市教育委員会 1982 『末広遺跡における考古学的調査(下)』。
- 千歳市教育委員会 1985 『末広遺跡における考古学的調査(続)』。
- 千歳市教育委員会 1994 『丸子山遺跡における考古学的調査』。
- 都出比呂志 1989 「第四章 五 土器の地域色と通婚圏」都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』pp.
321-359, 東京:岩波書店(初出は1983年)。
- 東京大学文学部 1963 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』上巻。

- 東京大学文学部 1964 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻。
 東京大学文学部 1972 『常呂』。
 徳井由美 1995 「付編 I 火山灰分析結果報告」常呂町教育委員会『栄浦第二・第一遺跡』, 431-438。
 常呂町教育委員会 1988 『TK67遺跡』。
 常呂町教育委員会 1993 『史跡 常呂遺跡』。
 常呂町教育委員会 1995 『栄浦第二・第一遺跡』。
 常呂町教育委員会 1996 『常呂川河口遺跡(1)』。
 苫前町教育委員会 1987 『香川三線遺跡』。
 豊田宏良 1987 「擦文土器に見る貼付囲繞帯文様の分析－馬蹄形押捺文を中心として－」『遡航』第5号, 59-82。
 仲田茂司 1997 「東北・北海道における古墳時代中・後期土器様式の編年」『日本考古学』第4号, 109-121。
 中田裕香 1990 「石狩低地帯における擦文時代後期の土器について」『古代文化』第42巻11号, 19-28。
 中田裕香 1996 「北海道の古代社会の展開と交流－一〇～一三世紀－」鈴木靖民編『古代蝦夷の世界と交流』(古代王権と交流1) pp.141-168, 東京:名著出版。
 中田裕香ほか 1999 「擦文土器集成」日本考古学協会1999年度釧路大会実行委員会『シンポジウム 海峡と北の考古学－文化の接点を探る－資料集Ⅱ』, 287-322。
 永嶋正春 1997 「第4節 K36遺跡タカノ地点第1号竪穴住居跡床面出土漆器椀2点について」札幌市教育委員会『K36遺跡タカノ地点』, 77。
 名寄市教育委員会 1979 『名寄市智東天塩川掘削工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』。
 新山隆男 1999 「第3章 第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物 土師器について」青森県教育委員会『櫛引遺跡』, 334-344。
 西 幸隆 1988 「北海道釧路市材木町5遺跡出土の湖州鏡について」『釧路市立博物館紀要』第13輯, 1-8。
 根本直樹 1985 「火山灰を視点とする擦文式土器編年の一試案」『北海道考古学』第21輯, 27-59。
 島山 昇 1998 「第6章 まとめ」青森県教育委員会『高屋敷館遺跡』, 352-353。
 日高管内郷土史研究協議会ほか 1967 『日高の文化財 [埋蔵文化財編]』第1集。
 深川市教育委員会 1997 『東納内遺跡』。
 深澤芳樹 1986 「6 弥生時代の近畿」『文化と地域性』(岩波講座日本考古学5) pp.157-186, 東京:岩波書店。
 福島町教育委員会 1972 『隠内館』。
 藤本 強 1972a 「第三章 第一節 調査の経過と問題点の摘出」東京大学文学部『常呂』, 51-61。
 藤本 強 1972b 「第七章 第一節 常呂川下流域の擦文土器について」東京大学文学部『常呂』, 407-433。
 藤本 強 1976 「第三章 第二節 遺物・遺構に関するいくつかの問題について」常呂町教育委員会『トコロチャシ南尾根遺跡』, 121-134。
 藤本 強 1982 『擦文文化』東京:教育社。
 北海道開拓記念館 1982 『ニッ岩』。
 北海道開拓記念館 1999 『札幌西高等学校郷土研究部・奥野清介氏資料目録』。
 北海道大学 1981 『北大構内の遺跡 昭和55年度 [1]』。
 北海道大学 1986 『サクシュコトニ川遺跡』。
 北海道埋蔵文化財センター 1984 『楠遺跡』。
 北海道埋蔵文化財センター 1998 『ユカンボシ E10遺跡』。
 北海道埋蔵文化財センター 1999 『ユカンボシ E 7 遺跡』。

擦文土器の編年と地域差について

- 北海道埋蔵文化財センター 2000 『ユカンボシ C15遺跡 (3)』。
北海道埋蔵文化財センター 2001 『ウサクマイ N 遺跡』。
北地文化研究会 1972 『浜別海遺跡』。
松下 亘 1986 「擦文式土器の刻印について」『物質文化』47, 19-39。
松前町教育委員会 1975 『建石遺跡 大尽内遺跡発掘報告』。
松前町教育委員会 1985 『札前』。
松前町教育委員会 1993 『原口館』。
三浦圭介 1994 「古代東北地方北部の生業にみる地域差」日本考古学協会編『北日本の考古学 南と北の地域性』pp.149-174, 東京：吉川弘文館。
三浦圭介 1995a 「第3章 古代」『新編 弘前市史』編纂委員会『新編 弘前市史 資料編1 (考古編)』pp.187-391, 弘前市：弘前市市長公室企画課。
三浦圭介 1995b 「北奥・北海道地域における古代防御性集落の発生と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第64集, 197-221。
三浦圭介 1998 「北日本の古代文化」『考古学ジャーナル』No.436, 2-3。
溝口孝司 1987 「土器における地域色 - 弥生時代中期の中部瀬戸内・近畿を素材として -」『古文化談叢』第17集, 137-158。
宮塚義人 1983 「小平町高砂遺跡の調査」『考古学ジャーナル』No.213, 12-16。
八木光則 1996 「藤手刀の変遷と性格」坂詰秀一先生還暦記念会『考古学の諸相』pp.375-396。
由仁町教育委員会 1969 『由仁町の先史遺跡』。
余市町教育委員会 1971 『天内山』。
横山英介 1981 「第3章 VII 総括」北海道大学『北大構内の遺跡 昭和55年度 [1]』, 34-35。
横山英介 1990 『擦文文化』東京：ニュー・サイエンス社。
吉岡康暢 1989 「4 北海道の中世陶器」吉岡康暢『日本海域の土器・陶磁 [中世編]』pp.293-334, 東京：六興出版 (初出は1979年)。

<図版出典>

- 図2 - 坏 A 千歳市教育委員会1978 Fig 7 - 2 を改変。
図2 - 坏 B 札幌市教育委員会1993 第62図 - 48 を改変。
図2 - 坏 C 札幌市教育委員会1993 第62図 - 42 を改変。
図2 - 坏 D 1 北海道大学1981 第5図 - 7 a を改変。
図2 - 坏 D 2 札幌市教育委員会1997a 第54図 - 10 を改変。
図2 - 坏 E 1 札幌市教育委員会1997a 第20図 - 5 を改変。
図2 - 坏 E 2 札幌市教育委員会1997a 第17図 - 3 を改変。
図2 - 坏 F 1 札幌市教育委員会1993 第24図 - 1 を改変。
図2 - 坏 F 2 小平町教育委員会1983a 土器443 を改変。
図2 - 坏 F 3 深川市教育委員会1997 図8 - 2 を改変。
図2 - 高坏 B 小平町教育委員会1983a 土器403 を改変。
図2 - 高坏 C 東京大学文学部1963 Fig. 5 - 6 を改変。
図2 - 高坏 D 東京大学文学部1963 Fig.10 - 9 を改変。
図3 - 長胴甕形態 I 札幌市教育委員会1993 第59図 - 9 を改変。
図3 - 長胴甕形態 II 札幌市教育委員会1993 第104図 - 1 を改変。
図3 - 長胴甕形態 III 札幌市教育委員会1989 第27図 - 1 を改変。
図3 - 長胴甕形態 IV 東京大学文学部1972 Fig.158 - 1 を改変。

塚本浩司

- 図7-1~9 千歳市教育委員会1978。
図7-10~38, 図8-18・21~23・25・27~29 札幌市教育委員会1993。
図7-1~17 北海道大学1981。
図8-19・20・24・26, 図9-15~22 札幌市教育委員会1997a。
図8-30~41 北海道大学1987。
図9-1・2・5・7・8・13 札幌市教育委員会1980。
図9-3・6・9~11 千歳市教育委員会1981。
図9-4・12・14, 図10-7・9 札幌市教育委員会2001。
図9-23~32 札幌市教育委員会1989。
図10-1~3 札幌市教育委員会1987b。
図10-4~6・8・10 札幌市教育委員会1999。
図10-11~12 北海道埋蔵文化財センター1998。
図11-1~16・18~21, 図12-1~4・6~12 小平町教育委員会ほか1983a : 小平町教育委員会ほか
1983b。
図11-17・22~24, 図12-5・13~15 苫前町教育委員会1987。
図13-1・3 常呂町教育委員会1995。
図13-2 東京大学文学部1964。
図13-4 常呂町教育委員会1993。
図13-5~12, 図14-1~12, 図15-1・4・5・7~13 東京大学文学部1972。
図14-13・14・17・19・20 常呂町教育委員会1988。
図14-15・16・18・21・22 常呂町教育委員会1996。
図14-23~33, 図15-2・3・6 東京大学文学部1963。
図16-1~8 松前町教育委員会1975。
図16-9~27, 図17-1・5 松前町教育委員会1985。
図17-2~4・6~9 奥尻町教育委員会1981。
図17-10・11 宇田川2000。